

Sæcret of Island

都弟 上紗紀

第1章	命の数だけ罪が成る.....	1
第2章	始まりと終わりの軋轢.....	25
第3章	人には映らぬ何か.....	49
第4章	永遠の夢の中に.....	73

第1章 命の数だけ罪が成る

時は随分と過ぎてしまった。紛争や政治という小さい我儘で故郷を失った人々、経済や技術という大きい我儘で環境が狂った地球——その先に待ち受けていたのは、静かな第三次世界大戦だった。始まったのは2030年頃だろうか、小規模な国は次々と姿を消し、今日まで旗を掲げているのは英国、米国、中国だけである。しかし、それ以外の地が物理的に消えたわけではない。統合された都市もあれば、放棄された荒野もある。人間も、文明も、規則も存在する。——ただ一つ、秩序だけは存在しない。

国際連合も世界人権宣言も機能しないのだから、そこでは人間が思う“倫理”を無視した計画が活発になる。倫理に囚われない集団が、あるいは大国に囚われた集団が、資産や権力を求めて生産的になる。武器や麻薬——自分と同じ“人間”も例外ではない。競争が始まれば、商品を改良しなければならぬ。もちろん“人間”も例外ではない。人間は古代から同種を殺し合い、苦痛を用いて情報を引き出す者もいれば、それを快楽として味わう者もいた。秩序や規則がそれらを禁止するのは大多数の利益を優先するためであり、最低限の犠牲と謳えば同種を檻に入れることも容易くなる。

ここは、経度■■■度■■■分■■■秒・緯度■■■度■■■分■■■秒に存在する一つの孤島、正式には「科学基地・27」と云う。氷河と厚雲に囲われた地が秩序に察知されることなく、そこに聳え立つ建物群は深層まで続いている。海洋に浮かぶ大型貨物船と一本の地下鉄道が全ての動力と物資を支えており、それらは人間の生活と“ヒト”の研究に費やされる。ヒトとは研究者や居住者ではない研究対象を示す俗語であり、基本的には専用の区画名と個体名が使用される。

「——マイケル！ 久しぶりじゃないか！」 「やあ——寂しかったか？」 「3日間も何をしていた!？」 「ちょっとした引き籠もり休暇さ。君も、最近は小部屋の掃除が多かっただろう？」 「科学者は3日も休みが貰えるのか、羨ましい」

施設の内部は無数の標示と高度な機械で埋め尽くされており、その多くが人間やヒトの煩雑さを物語っている。徹底的に管理されているのは人間もヒトも同じであり、白衣を纏った私の身分が行動できる箇所は基地の1割に満たない。様々な役職の人間が行き交う妙に幅の広い廊下を施設の共通点として語るのは、背理法ではなく背理的なのだ。

「急に姿を消すから、変な気でも起こしたのかと」 「悪かった。次は君に伝えてから休むよ」 「マイケルが来ないと、科学者の“特権珈琲”は手に入らないからな」

下衆に笑う清掃員のマットへ珈琲を渡し、私は再び歩みを進める。果てのない廊下に並ぶ数字だけが名付けられた扉の先には特定の区画があり、そこでヒトの科学的な調査が行われる。それが何に使われるのか、誰に使われるのか、誰が利益を得ているのか、誰が活動を支えているのか、施設の規模も人口すらも分からない。ただ、ここに住む人間は規則という形而上の機構に従う必要がある。従わなければ、兵士という形而下の秩序が足音も立てずに人間を肅清するのだ。

目的地に到着した私は、灰色の壁に埋め込まれた装置へ指と瞳を押し付ける。小窓もない鋼鉄の扉が滑り、小さく明るい空間に両足を乗せると数秒後に足場が降り始める。快適な加速度で動きが止まると、前方には小窓が付いた扉が現れる。開閉切替を押さなければ先へは進めず、扉が滑ると同時に異質な空気が昇降機を満たしていく。先程よりも薄暗い廊下と忌々しい部屋が占める空間は、これだけ嚴重に管理されているながら施設全体では資産価値が低い場所として区分される。

大窓が存在する部屋には、必ずヒトも存在する。手術用不織布が敷かれた寝台へ括り付けられて自律的に行動できない“それら”は例外なくアナログの生命維持装置に接続されている。直接的に関わることは滅多にないが、視界へ映る度に私は何かを考える。

大型の台車で薬品を運ぶ2人組と入れ違いになり、ガラス張りの壁へ身体を躲すと、そこでは今日も変わらず【ドロシー】が目を瞑っている。それは妙に肩幅が広く、三つ子も簡単に収まりそうな腹からは遺伝子複製の異常によって生成された幾つもの内蔵が露出しており、その“編物”はカノポス容器へ収納される。テロメアが機能しないそれは30代の姿であるが、実際は88歳と科学基地よりも長生きするミイラである。

当然ながら需要が尽きない【ドロシー】の機能は何体ものヒトへ移植されるが、完璧に複製できないのが実状であり、それは廊下を一望すれば明瞭である。多くのヒトは原型を留められず、歪に朽ち果てた顔面や関節の皮膚はIII度の熱傷を負ったように焦げていく。それらが不活性になるまでの期間は約1ヶ月であり、そこで“収穫”できる成果は疎らな品質を持つ数個の内蔵——あまりの非効率性に、科学者は頭を抱えている。

大抵のヒトは脳死であるが、この区画では唯一、意識を持つ“双子”が存在する。その名前は【ニック】であり、一つの体と頭には2人分の臓器と大腦が融合している。半鏡の内側で暮らす【ニック】は隣にヒトが存在することも、ヒトの存在すらも認知しておらず、食事や遊戯の合間に退屈な面会を行う程度である。胚に【ドロシー】の遺伝子を挿入した結果であるが、自分の容姿も知ることなく【ニック】は処分されるだろう。

私は廊下の突き当りを左に進み、地下鉄道に続く部屋の作業台へ腰を掛ける。目の前に置かれた分厚いキーボードで橙色に光るコンソールへ認証情報を入力するが――このような各所に置かれた時代遅れのコンピュータは、予算の都合というより電磁パルスや電波盗聴といった危険性を分散的に回避するための仕組みらしい。

カーソルキーを連打して本日 of 運送内容を確認するが、どうも様子が可怪しい。搬入や搬出が予定されていた物品が、漏れなく中止されている。

「アマンダ、運送内容が普段と違うが……何があった？」 「何って、2日前の陥没で電気系統が壊滅したでしょ。内部報道でウンザリするほど聞いたじゃない」 「何と、そうなのか!」 「この限が何よりの証拠……そうそう、左側の付箋に貴方の引継内容が書かれていない?」

改めて無駄な情報の羅列に眼を向けると、私宛に今日の簡単な予定が書かれていた。海上では搬入と搬出が同日に行えないため、今から30分後に肌寒い白夜の下で大量の備品を引き取り、収納を済ませてから再び数個だけの成果物を行先も知れない貨物船へ載せる必要がある。当然ながら地上付近の一次倉庫は満杯であり、大量の搬入物を確認しては一々と施設へ……嗚呼、快調の気分が台無しだ。

甲高い音で印刷される数枚の一覽表をクリップボードに挟み、私は席を立つ。

「お疲れ様、行ってくるよ」 「3日間の贅肉を消費してらっしゃい」 「そうだな、ハハッ……」

自分よりも体脂肪率が高いであろう彼女を尻目に退出した私は、地下鉄道の方角を外れて馴染み薄い地下駐車場へ辿り着き、慌しい光景を後に貨物自動車を確認する。サンバイザーから鍵を取り出し、極寒を物ともしない最新式のディーゼルエンジンが車内を僅かに震わせる。

座席の後ろに置かれた防寒具を羽織り、荷台の機材を点検する。長椅子の下に収まる冷凍庫、壁に埋め込まれた空調機、少し錆び始めた昇降装置、諸々——無駄な行動だと分かっているが、古の習慣が私を強制するのだ。

何百メートルも続く長い地下通路を抜け出すと、低位置にある太陽が白い世界を映し出す。港のガントリークレーンは既にコンテナを運び出しており、目の前には数多の自動車が行列を成していた。貨物船は基本的に食料や機材といった“普通の”物品を低頻度で大量に運送するため、今日や明日の例外では大混雑が予想される。私を含めた地下鉄道の利用者は地上の規則に慣れていないため、更に時間が掛かるだろう。

ただし、悪いことではない。この時間は合理的な休息や私事が可能であり、窓の外ではヒートポンプによって融雪された地へ、数人が全身で日光を受け止めてはビタミンを生成している。3日間か、それ以上に日光を浴びなかった私も扉を開けて——まだ汚染されていない新鮮な冷気を体内に取り入れては、彼らと同じ格好で気を落ち着かせる。

どれだけ時代が進もうと、環境が荒もうと、太陽のエネルギーは常に安定している。

この感覚は、人間だけが味わえる。架空の産物として周知されていた“ゾンビ”は既に実用段階まで進んでおり、目的に最適化された大脳と馬鹿力を發揮する筋肉で動くそれらは、想像の通り赤外線にも紫外線にも弱く、実戦では夜間に投入されると聞く。この島で行われる実験に一切の冗談は存在しないが、地上で堂々と展開される【生屍体】の干物や紅色の十字架に括り付けられた姿は、何とも滑稽であり可哀想でもある。

——私が人間の身体を堪能していたとき、突如、不快な警報が港に鳴り響く。それは嚴重に管理されているはずの機構に“想定外の事態”が発生したことを意味する……警報には種類があり、区画に応じて選択される。しかし、この音は“ヒトが管理不能な脅威を誘発した”際に鳴るもので、ここで鳴るということは“脅威が施設の最上層に到達する”最悪の状況……それが、まさに現実にかけている。

へこれは訓練ではありません。繰り返します、これは訓練ではありません。――全ての港を封鎖してください。直ちに避難区域へ逃げてください。全ての港を――」

混乱する多くの従業員は鋼鉄の門が聳え立つ避難区域へ走り出す一方、散乱していた兵士は一斉に港へ駆け出す。10秒も経過しないうちに戦闘車両やヘリコプターが飛び出し、稀に見ていた訓練と同様の態勢を作り出す。

――私は、初動が遅かった。だが、それが正しかった。10分前に通過した地下通路から、更には半開きの避難区域から、続々と「何か」が出現した。少なすぎる情報で、その正体や正確な数を把握する余裕はない。あちらこちらで自動小銃が空気を震わせ、視線の先では数名の「生身」が何かに食い荒らされている。完璧に焦点は合わないが、確かに、鮮やかな液体が爆散している。

悲鳴、轟音、それが止むことはない。気付かぬうちに、脅威は目前まで迫っていた。反対の方角へ走り出す集団に紛れた私は先陣を切る――目的地など存在せず、ひたすら足を動かした。上空に浮かぶ複数の機関銃が後方を迎撃する――それがヒトであろうと人間であろうと構わず、私たちに見えない恐怖と明確な生死の境界を与えた。全ての音を掻き消す銃弾の雨に殺されるほうが、幾らかマシな最後だろう。

青白い芝生を突き進む中、私は妙案を思い付く。枝分かれする砂利道の側にはコンクリートで作られた大型特殊車両の倉庫があり、そこには階段まで掛けられている大型のホウルトラックが出入口に面を向けていた。軍事車両ほどの強度はないが、250トンの重量は屍の道を作るのに十分だろう。

私は群から外れるが、何人かは私の後に続いた。振り向いたのは僅かな瞬間であったが、地上に這い出たヒトの数は尋常ではなく、その脅威は孤島を丸ごと爆破しても相殺できるか怪しく——いいや、規則が正常であれば時間の問題である。

死に物狂いで階段を駆け上がり、我先にキャビンの中へ飛び込む。冷静に施錠をして横を振り向いたとき、そこには私と同じ考えを持った男が助手席で身を潜めていた。

「……なぜ、施錠していない!?」 「あ……、え……」

後続していた人間は必死に扉を叩くが、間もなくヒトの到来により終焉を迎えた。窓ガラスへ豪快に飛散する血痕と肉片が私たちの存在を眩ましているのか、それらは同属を摂取するのに必死であった。

私は人差し指を口に当て、彼と一緒に身を屈める。その男は顔を震わせながら無言で錯乱していた。私と同じ白衣と防寒具を着ているが、当然ながら面識はない。

朱殷色に染まったガラスの隙間から、それらが次の獲物へ走り行く様子を確認した。私は深呼吸をするが、死体の生臭い空気は既に室内へ浸透しており、とても後悔した。

「何なんだ……あれ……」 「おそらく、軍事目的で作られた量産型のヒトだな。普通の【生屍体】にしては動作が本能的すぎる。正確に見たわけじゃないが、趾行か蹄行で走っていた。あれが地上まで進出したのか、あれを含む何種ものヒトが解放されているのか——考えたくもないな」 「……怖くないのか？ なぜ、冷静で居られる!？」

「この島に來た時点で、恐怖を捨て切れなかったのか？ あれに痛覚を刺激されるのは御免だが、それよりも怖いのは——あれを生み出した人間だ」 「……」

世界は赤色に染まっている。無責任な放射性物質や細菌兵器が飛び交うことで、無数の生命が滅び、居住可能区域が減り、人類の滅亡も現実味を帯びている。

この島へ來た人間は赤色の主義と契約を交わすことで隔離した生活を手に入れたが、それは文字通り、世界最大の脅威の上で成立する。多くの科学者は黙示録という運命を否定するどころか、その上に立つことで確率の制御を試みるが——残念ながら、ここが終焉を迎える時代であり、皮肉にも人類が抱える逆説は解決した……いや、同属のヒトが生き残り続ける限りは“人類”の終焉とは言わないか。

ドリンクホルダーから鍵を取り出し、それを挿すが、回す前に私は呟く。

「科学者は何を優先する？」 「何って？」 「ここから、どう行動する？」 「脅威

の……拡大の阻止、情報の伝達、それと、原因の解明か？」 「原因の解明か——随分

と余裕があるな。ヒトの抑制と報告は上空に居る兵士が行うはずだ。私たちは——」

その時、ガラスを伝い衝撃音が響いた。それは爆発音というより、墜落音であった。

「あれ……ヘリコプターか？」 「不味いな。だが……何故？」

嫌な予感的中した。戦闘不能の機体から這い上がる人影に、一発の銃弾が当たる。

それは偶然でも自殺でもなく、兵士から独製の自動小銃を拾い上げたヒトによる、明確な発砲であった。一体ではない、視界に映る範囲の土地を制圧した無数のヒトが同様に武器を正しく構えている。

逆関節の脚で立ち竦むそれらは、顔面を中心に筋肉質な肌を朱股色で汚している。対して、それ以外の個体は——例えば人間に群がるヒトは、それまで血を浴びておらず、私たちと最も近い距離に居るヒトは、上顎骨と歪な前頭骨に挟まれた目玉を使い周囲を見渡している。——あれらは、脳死ではない！

「エネルギーだ。あれらは、動力資源のために人間を襲っている！」

ふと、一体のヒトと視線が合う。非常に由々しき事態だが、ここで頭を引っ込めてはならない。……しかし、その数秒後には脈絡もなく、他のヒトが続々と私たちを見詰め始める。あれらは——高度な知能の他に情報を共有する手段も持ち合わせているのか？

「行くぞ！ 行くぞ！」 「え？ え!？」

私は即断した。鍵を回すと同時に台形のアクセルを強く踏み、猛獣のように唸るエンジンで巨体を始動させた。倉庫から半分ほど飛び出た時点でハンドルを左に回し、港へ直行する。既に多くの弾が飛び交っており、大凡は運転席か、車輪か、あるいは軽油が入った燃料タンクに照準が定められる。一方で直径4メートルのタイヤは死角のヒトや人間の亡骸を容易く潰す——だが、こちらが不利なのは圧倒的であり、巨体を回避した素早いヒトは時速40キロメートルで動く梯子を掴み——ノイズに混ざる足音が段々と大きくなる。

「シートベルトをしろ！」 「了解!」

目の前には埠頭の境があり、そこには無数の自動車と赤色に点滅するボラードの線が立ち並ぶ。視界の右から2体のヒトが甲板に現れた瞬間——障害物を乗り上げた巨体は大きく飛び跳ね、それらは衝撃に負けてタイヤの真下へ“ダンプ”される。

私はハンドルを強く握り、巨体との共振に努める。横の男は——トグルが並ぶ箱に額を打ち付けたらしく、辛うじて意識を保ちながら血を垂らしている。しかし最も様子が悪いのはハウルトラックであり、シャフトが湾曲したのか、異物が絡まったのか、金属の悲鳴と共に速度を落とし始めた。

「駄目だ、降りるぞ」

停車した地点は、貨物船から300メートルほど離れたコンテナの山場であった。残念ながら剥き出しのアスファルトに孤立した自動車はなく、コンテナ専用車は全てが貨物船の下甲板へ続く斜路に群を成していた。そして今まさに、唯一の架橋が畳まれようとしている。人間が逃げるためか、ヒトを逃さないためか——糸口を見つけた今の私には関係ない。

右の扉は未だ肉の塊が支えており、男の後に続いてキャビンを抜け出し、黄色と灰色と赤色が溶けた階段を駆け下りる。格子状に並ぶ2段前後の鉄の箱と3塔のクレーンが移動する線路は最も拓けており、遅れて走り行く何十の人間も目視できる。走れば1分で辿り着く——それが罠であり、そこへ飛び込もうとする彼の腕を掴んだ。

「止める、離せ」 「30秒後に頭を“抜かれる”ぞ」 「……」

脅威と500メートルの差を付けてから10秒が経過しており、コンテナヤードの通路へ向かうのが精々であった。あれらの射撃性能は未知数だが、高度50メートルに浮かぶ防弾の機体を追撃できる以上の精度は持たない——そう祈るしかない。

粘着力を持つ足裏は朱殷色の跡を残すが、十字路へ辿り着いたときには消えていた。暑苦しい上着を脱ぎ捨て、私と彼は次のブロックへ、更に次へ走り続ける。

右から数発の発砲音が聞こえた刹那、私は右ではなく後方を振り向いた。そこには例のヒトが——自動小銃を持つ個体は道の中央で片膝を立て、それ以外は両端から全速力で私たちを追い掛け始める。嗚呼……隙が無さすぎる！

「走るぞ！」 「正気か!？」 「私に続け、外れるな！」

横の道へ身を隠した私たちは、一か八か、再び縦の道へ足を踏み出した。右から左奥の遮蔽へ、休むことなく、左から右奥の遮蔽へ。無駄な距離と時間を掛けるが、それと対価に単発で放たれる弾を避けられる。有効射程であるにも関わらず連射で確率を上げないのは——弾の消費を抑えているのか？ 何を目的に？

このままではヒトに追い付かれるが、縦も横も道の幅が同じなのには理由があり、私是一个の可能性に賭けていた。そして、次の運は私に味方した——フォークリフトだ。

遮蔽にはコンテナを鷲掴みにしたままの機体が乗り捨てられており、更に都合良く正面を向いていた。私は記憶と感覚を掻き回しながら飛び乗り、駆動音、ハンドルの角度、レバーの位置、それらを把握した瞬間——アクセルを思い切り踏み、リフトレバーを押し出す。十字路でハンドルを右へ切り——僅か8秒で射線を遮ることに成功した。横目に見た疾走する脅威との差は150メートル。おそらく、あれは並の人間よりも走りが速い。しかし、2つ目の“鉄塔”を駆け上がるには十分だろう。

「行くぞ！　行くぞ！」　「アンタ、何者なんだ!？」

無意味な銃声が途絶えた縦の道を一直線に走り、そして、線路までの危険地帯を再び運に任せて横断した。周囲には数多の射抜かれた死傷者が散乱しており、今までの行動は“間違いいではない”ことが証明された。視界の左では今も生存者が疾走しており、右から断続的に放たれる223口径の鉛が私たちの道と交差する。この射程では的の動きなど関係なく、死ぬか否かは確率的——つまり運に左右される。

投げられた硬貨は表を向いた。無傷でクレーンの足元に辿り着いた私と彼は切らした息も全ての恐怖も気にせず、高ぶる鼓動を動力源に梯子を登り、脚骨に巻き付く階段を上り、貨物船まで続く100メートルの鉄骨の上部を駆け抜ける。

アドレナリンで満たされた人間に躊躇いはない。跳弾の騒音、脅威の足音、それらに怖じけることなく、最後に待ち受けていたのは――8メートルの高低差である。

私は走り得た速度を殺すことなくクレーンから飛び降りた。可能な限り垂直に体勢を保ち、コンテナの山へ足が付くと同時に、縮めた身体を派手に回転させることで衝撃を分散させる。それでも素人には厳しく、無数の細胞組織と数本の骨が傷付いた。

貨物船の推進器が始動している今、1メートルの差よりも1秒の差が生死を決める要素であり、それを彼は理解できていない様子だった。

「無理だ!」 「できる! 私は無事だ!」 「後から浮輪を出してくれ!」 「水に飛び込むのか? 止めておけ、骨が碎けて凍死する」 「……クソツ、クソツ!」

数体のヒトが階段を登り終えたとき、決意を決めた彼は後ろへ下がりを始めた。少なくとも彼は賢い部類の人間であり、観察した私の例を真似するようだ。――だが、残念ながら才能はなく、1秒後、少し離れた地点へ着地した直後に大声で叫び始めた。

「……骨折したか」 「――」 「……よくやった」 「――」

10秒後、ヒトは鉄骨の末端から頭を出した。しかし、その真下は既に氷点下の海面であり、その様子を確認した私は、無味無臭の空気を肺に取り込み、腰を下ろした。

幸いにも彼の怪我は肉を貫くような骨折ではなく、船内の救急箱で完治できる程度の具合であった。右足に巻き付けたスプリントを遠慮気味に投げて座る彼と側に立つ私が佇む場所は居住区の待合室であり、他に十何の人間が——ある者は緊迫した表情で小言を呟いたり、ある者は現状が把握できず混乱していたり、意外にも現実味のない雰囲気ので満たされている。

「……ありがとう」「肩を貸すぐらい、お安い御用さ」「いや、出会ってから、今

まで——アンタが居なければ軽く3回は死んでいたよ」「ハハッ、冗談が言えるまで

落ち着いたようだ」「あんな光景を、あんな体験をすれば、他に怖いものはない……

いや、貴方が怖い」「失礼な、私は運転だけが得意な普通の人間さ」「……」

結局のところ、今世を生きるのに必要なのは確率の選択と多少の幸運であり、それを私は知っていた。何事にも動揺しない秘訣であれば、常に死を覚悟することだろうか？

「名前は？」「私の？ 私はマイケルだ。頼むから“マイク”とは略さないでくれ」

「……ありがとう、マイケル。僕の名前はライナー、よろしく」

差し出された手を握り返し、私とライナーは現状の整理と仮説の提唱に少々の間を費やした。現場を目撃していない数名の船員が、話は何気なく耳を傾けている。

「——まさか、基地が完全に占拠されるわけがない！ 至る場所にお節介な警備が完備された巨大な迷路を……システムエンジニアの僕が保証する」 「それなら、尚更理解するべきだ。あれらが最低でも機密水準Ⅲ以上の軍事製品と仮定して、20分足らずで地下80メートルから地上へ辿り着いたなら、昇降機を管理する基幹、いや、地下鉄道の結節点までヒトが侵害したことになる。噂に聞く『完全破壊』のシナリオが未だ実行されない点も納得できる」 「確かに、そうでも……危険信号4・Bの直後に機密水準Ⅲの脅威が地上へ這い出るのは変な話だ。昇降機が階層を通過する前後には必ず4・Aが全域へ通知されるはずだし、その途中に脅威が生み出されたのであれば経路に関する設備は完全に閉まるはずだし、それ以降なら一部の施設は——」

ライナーは不意に口を閉じ、何か恐ろしい想像を顔に出した。その数秒後に私も無言で彼の考えを察した。前提を間違えていたのだ、あれらは……下から来たのではない！ 「待っていたのか……？ 地上へ運搬されるまで……？」 「いや、それ以上——この貨物船で運搬されるためだ」 「まさか、地上で暴れる必要は——」 「理由は分からない、ただ、あれらには都合が良い。一瞬で基地を制圧できたうえに、定員以上の非力な人間……十分な動力資源も確保できた。第一に、なぜ、この船を追わなかった？」

その時、船員であろう髭を持つスラブ人が私たちを脅した。下らない妄想を喋るなど言うので、私は事の重大性を伝える。しかし、彼は「戦地だけの世界に怪物が放たれて何が変わるのか」と嘲笑うばかりであり、居心地の悪い私はライナーと一緒に待合室を後にした。不安を煽らないための配慮というよりは、その仮説を確認するためである。

誰かの防寒具を羽織りながら通路を渡り、防水扉の前に置かれた「マスターキー」を構わず取り外し、それを右肩に外界へ出る。

「ライナー、コンテナの仕組みは、知っているか？」 「仕組み？」 「保管装置と

保護装置が組み込まれた二重構造は——外だろうと中だろうと、開けるには「キー」が必要になる」 「……その斧は「キー」なのか？」 「違う、無理に開けようとすれば

中身が抹消される……静かな爆発で」

装置は日替わりするコード以外にも、電波が届く限りは遠隔による制御が可能であるが、保護装置に過度な衝撃を与えてしまえば抹消が最優先される。中に潜むヒトは摂氏1800度の熱波により、骨すらも溶かされる。初期に遠隔でヒトを解放した「誰か」が勘付く前に実行しなければ——だが、相手は私たちの一足先を進んでいた。

「……マイケル、このコンテナに……ヒトが「入っていた」のか？」

ライナーが発見した数個のコンテナは既に開いており、全ての扉軸と封印環が折れ曲がっている。狭い通路を塞ぐ扉へ、斧を構えて恐るゝる近づくも、やはり、内側の扉も開いている。暗闇にヒトの姿はなく、清潔な内装が爆発した可能性を否定する。

「これで援護を頼む」 「……今更、爆発はないよな？」

監視映像で気付かれるリスクを背に、私は静かに保管装置へ近づく。ヒトの種類でも区画の番号でも、とにかく有益な情報が欲しかった。保護装置に書かれていた区分表示は機密水準Ⅳ・300、記号は有機物、製造物、人工生物、ホモサピエンス派生物——そして、保管装置に小さく印字された【強外骨格二脚子機…REBU】という種類名、しかし、それと同系列で記されていた【ネスト】という名称が引っ掛かる。少なくとも私の身分では見慣れない命名方式だった。

「……ところで、ここに居たヒトは？」 「……機関室だろう。確実に、この船を制圧する気だ」

やはり、頭数も戦略も人間に勝っている——ここから臨機応変にあれらへ対応するのは不可能と悟った私は、居住区へ続く通路を曲がり、救命艇のダビットを下ろす。横のハッチを開き、エンジンを掛けて甲板へ戻るが、ライナーは斧を握り足を揃えていた。

「何もせず、逃げるのか？」 「ああ。無計画じゃ齒が立たない」 「それなら、他の

乗員に伝えてから——」 「そんな時間はない。説得に何十分を要すると？ 君が残り

たいなら話は別だが」 「それでもいい、ただ、マイケルが一人で乗る舟に乗れない者

の運命は、どうなる？」 「良い着眼点だ。救命艇は片側の艘で全客室分が収まるよう

に用意されている……船員も非船員も離脱できるさ」 「……」

「どうした、時間は——」 「静かに！ 下に……足音か？」

鈍い機械音と微かな風を除いて耳を澄ますと——下方から聞こえる金網の階段を駆け上がる振動、それは、数名の人間が出すような音ではなかった。

「……ここで勝つ方法は？」 「8人の戦闘員が最大48体の【REBU】を蜂の巣にすればな。少なくとも腹側は防弾だろうが」

「……これを下ろすには!？」 「そこを切れ！ 上に飛び乗れ！」

私はハッチへ飛び込み、彼は斧で制御ワイヤーを叩き切る。2回目の衝撃音で救命艇は降下を始め、70キログラムの物体が天井に着地した2秒後、操縦席へ腰を下ろした私はOLワイヤーを切り離すと同時にスクリュープローペラをフルスロットルで回す——今は、1秒すらも惜しい。

しかし、窓の先には一つの誤算が存在した——天井に聳え立つ“物体”は靴を履いておらず、長く鋭い足の付け根には逆関節の筋肉質な脚が伸びていた。上でライナーを瞬殺したか、それとも無視したか——そんな仮説を立てる間もなく、救命艇が着水すると同時に新たな物体が天井に着地した。

衝撃で腰が滑り落ちた私は、その結末を見逃した。しかし既に希望的観測もなく、壁に取り付けられた手斧を持ち、飛び出る勢いで扉を閉めると同時に身を構える。

その数秒は、思考が使える最後の間であった。死を楽に受け入れるか、死を苦として跳くか——原罪も贖罪も知らない私は、死生観を思う人間の気持ちを知りたかった。

奇妙な静寂が訪れ……そして、上部のハッチを規則的に叩き続ける物体が存在した。

「マイケル！ マイケル！ 開けてくれ！」 「……」 「ライナーだ！ 斧で奴の頭を粉碎してやった！」 「……！」

視線を感じた私は上を向くと、そこには、上半身を朱殷色に染めたライナーが大声で訴えていた。急いで後部のハッチを開くと、初めに斧が頭へ突き刺さった【REBU】らしきヒトの亡骸が投げ入れられる。続いてライナーが僅かな体力で内部に飛び入り、扉を閉めると静寂が……というより、外には過酷な雑音が存在したことに気が付いた。

得体が知れないヒトの横で寝転ぶライナーは、呼吸の合間に言葉を発する。

「へへッ……これで死1回分の借りは返せたな」 「……借りを作った覚えはないが、

そうだな」 「もしかすると、自分は……飛び降りが好きらしい。2回目は恐怖どころ

か、快楽が唆られた」 「アドレナリンが分泌された影響だろう。それとも、旧露国製

の血が口に入ったか？」 「……もしかして、やっと安堵した？」

ふと、私も彼のように警戒心が無意識のうちに解けていた。その言葉を聞くと同時に天井を見上げるが、そこには何もない。詩的に言うのであれば、赤く淀んだ窓の奥には鼠色の雲が浮かんでいた。

「【REBU】は、1体だけか？ お前は、襲われなかったのか？」 「このバケモノ

なら、見向きもせず舟へ飛び降りた。そうだ、お仲間が続々と甲板に現れて……追い

掛けて来なかったな……水が苦手なのか？」 「違う、追い付けないと分かっていた。

お前が無視されたのは、情報あるいは不安要素が漏れる事態を優先した」

その行動は、既にヒトの領域を逸脱していた。脳死ではない研究も珍しくはないが、これだけ自律的に機能する知能を完全に制御するのは至難の業であり、それが機密水準の深淵を物語る。むしろ、孤島の人間こそがヒトの研究対象である可能性も有り得る。

しかし、人間も馬鹿ではない。ライナーはたった数時間で本来の過酷な世界を知り、僅かながらも大きな一步を踏み出した。キャビンで震えていた彼が、自律的に“情報”を確保してくれた。人間はイタチの尻尾を掴むのが上手いのだ。

「……マイケル、この舟は、何処へ向かっている？」 「方位330度——中途半端な

装備じゃ海を渡り切れないが、希望なら一つだけある」 「つまり死か？」 「違う、

誰も知らない孤島だ。この地獄に存在する数少ない楽園——そういう噂だ」 「……噂

と言う割には、随分と確信的だな」 「……話せば長くなる」

私は幾つかの情報を知っていた。その孤島を往来する船舶らしき雑音を気紛れな氣象レーダーが観測するも、実際の脅威ではないと判断されたこと。科学基地と同様に上空からの検知が難しくも、確かに陸地が存在すること。そして——それが私の故郷であること。

今更【REBU】に占拠された貨物船がリスクを冒して大陸と真逆の方角へ進む可能性は低く、文字通り私たちは眼中にないだろう。このまま“秘密の島”で余生を過ごすのも悪くはない——代わりに、人間がヒトに滅ぼされる未来を私は容易に想像できる。世界の正しい姿など知らない。ただ、想像と破壊の区別があれば秩序を知っている。

第2章 始まりと終わりの軋轢

体力を使い果たした私は朦朧とする意識で計器を見ながら、滑り落ちそうな手でハンドルを握る。既に5時間は経過しているが、地平線に島らしき凹凸は現れず、代わりに厚雲の隙間から現れる不動の太陽が多く、感覚器官を狂わせる。大凡の人工衛星が機能しない現代では電子式の地図など役に立たず、2世代前に作られた錆び付いた機械式の座標測定器が唯一の頼りである。

——次に目が覚めたのは、連絡用の周波数と最大音量に設定された無線機器から謎の声が出力された瞬間であった。

「こちら匿名通信基地局、救命艇は応答せよ」 「こちら救命艇、どうぞ」 〈乗員の

人数、所属、状況を聞きたい〉 「乗員は2人……それと1体。所属は明言できない。

貨物船の有事に際して脱出した」 〈その“死体”は何が原因で死亡した?〉 「それ

が……難しい話でな。人間と同種でも仲間じゃない……簡単に言えば“凶暴な怪物”を殺した」

10秒以上の沈黙が続いた後、ビーブ音と同時に息を殺した声が続いた。

「君たちを《国際科学支援機関…ISSO》の諜報員として取り扱う。何か異論はあるか？」 「ご名答。信用するのは難しいと思うが、科学基地の産物が反乱を始めて今に至る。君たちの“諜報員”は状況を知らせてくれたか？」 「残念だが答えられない」 「私たち？ 諜報員？ どちらにせよ、それが“答え”だ。貴重な情報を提供するからくれぐれも殺すなよ？」

彼、いや、彼らは話が早い。世界の4割の運命を握る科学基地には、言うまでもなく様々な諜報員が潜んでいる——だが、科学基地は“敢えて”一部の情報の流出を許しており、特定の領域へ入らない限り、秩序に消されることはない。むしろ機材を窃盗するほうが罰は重く、噂話が混沌とする今日では構造的物質の価値が最も高い。

「間もなく救助部隊が到着する——周波数を変えず、指示へ従うように」 「了解……：そういうば、北の“グロドグロール”は完成したか？」 「随分と時代遅れの歴史を勉強したようだ。知りたければ、島の名前を答えてみる」

地平線から2台のヘリコプターが出現した——小翼に発射機構を搭載した雄々しい姿は救助というより撃墜の遂行を悟らせるが、見飽きた光景に恐怖を感じることはない。「存在しない島に名前を付ける奴はいない。愚かな勤勉者は『ムー』と答えるが」

彼は何かを喋ろうとしたが、通信局の静かなノイズが途切れるとヘリコプターの通信へ切り替わり、救命艇の屋上へ出ると指示される。外へ出たライナーと私が両手を頭に組むと、喧しい音が指数関数的に増加する。ホイストで降下する黒色の隊員は自動小銃を手放さず、私たちを確保すると1台の機体を現場に残して離脱した。彼らは法治国家のように非戦闘員を手荒に扱わないが、ヘッドセットを貸してくれることはなく、私は轟音を無視して地平線を眺め続けた。

10分後、ヘリコプターは浜辺へ着陸した。彼らは粉塵を毛嫌いしており、ブレードを止めてから3人の戦闘員と私たちを下ろし、しばらく歩き続けると機体は離陸した。左側には青藍色の海面、前方には黄昏の白夜、右側には灰色の断崖が続き、向かう先は——岩々に跨る石造の階段があり、その手前に複数の人影が待機していた。ここを対談の場にしたのは、外部から来た馬骨を離岸流で手軽に処理するためだろう。

道中には場違いな茶色の鶏が居た。それは私たちに気付くと走って近づくが、3人目の戦闘員は容赦なく鉛弾を撃ち放つ。飛散した些細な死体は小波が響く浜辺を感傷的にするが、その光景は——戦争によって道徳を失った人間ではなく、人間によって秩序を失った戦争を暗示している。この“対人動物兵器”も、戦争が人間に作らせた秩序だ。

「こんにちは。能く、ここを見つけたわね」

「……深淵を覗くなら、覗かれる覚悟もあつたはずだろ？」

翡翠色の右目を整った長髪で隠した女性は、優しい皮肉を私たちに問い掛ける。それに応えて、私は舌を差し出す。

「僕たちは……殺されるのか？」

「貴方たちが敵であれば……そう」

「貴女は仏陀

の“原理”を学ぶ人間だろう？」

「嘘だ、彼らは鶏を殺しただろ！」

「弱肉強食は

変えられないの」

彼女の隣にいた男性が会話を打ち切り、紹介と本題へ入るように促す。洋服に赤色の上品な長布を纏うロベルタ・ロッシュは「脅威分析会」を総括する教徒、白髪で軍服を着込むゲルマンは多くを語らないが、彼女の会に連携する軍事の上官と予想できる。

彼らの背中に続いて階段を上る中、私は科学基地で発生した有事から今までの経緯を詳細に説明した。ヒトの群が制御不能な行動を起こしたこと、それらが貨物船を通じて拡散を試みていること、その一つが防弾性能を持つ【REBU】であること——当然のように基本的な専門用語を受け取るが、見晴らしの良い場所で立ち止まった彼らは理解と恐怖を折々に表情を変えた。

「——それらは言葉を介さずに意思疎通を？」 「ああ、少なくとも、本能や直感ではなかった」 「……どこかで【ネスト】という種類名を聞いたことは？」 「何と！」

ロベルタは機密水準Ⅳを、正確には下層の合同研究として計画された成果物の正体を教えてくれた。それは脳死ではないヒトの神経を制御する人工肉菌【ネスト】と複雑な手順で生成した人間の数百倍の容積と性能を誇る人工大腦【ビッグ・センター】を主に構成された多目的生物制御機構であった。私が通信方法について問うと、それは従来の電子計算機よりも圧倒的に優れた脳の配列認識と最適化で実現する、超弦理論が示した余剰次元を用いた名も知らぬ粒子の確率的な作用の同期であると簡単に説明される。私は物理学も専攻していたはずだが、頭に持つ“モノ”では3割も理解できなかった。隣にいるライナーは今にも歩きながら眠りそうだ。

「つまり、その【ビッグ・センター】が暴走して有事が発生したと？」 「そう。元は一生を経験した人間で、確実に高次記憶を持つ」 「……確証は？」 「今の話は、シナリオで想定されている——【ビッグ・センター】の補助職員を務めた私の提案——科学基地から逃げた最大の理由よ」 「……長い話が在るんだな」

この現実を事前に見極めていた彼女は、この瞬間から最も正しい人間と認識できた。

「……そこまで説明してくれるのは、僕たちが敵ではない証か？」 「いいえ。少なく

とも『ISSOの敵』として見てあげる」 「この階段は街へ続くのか？ それとも崖

か？」 「安心しろ、ここでは『疑わしきは罰せず』だ。諸君が味方なら居心地は良い

はずだろう」 「インターネットも使い放題か？」 「インターネット？」 「ハッ、

40年前に消えた概念を冗談で使うとは……君は時間旅行でもしたのか？」 「……」

国や税が機能しない今日では民間用の海底ケーブルを維持する事業などは存在せず、

ロベルタのような若者はインターネットの存在すらも知らないらしい。

聳え立つ断崖の側面には、通路や階段の他に赤色の支柱と黒色の屋根で作られた建造

物の一部も突き出ているが、そこへは向かわず更に上を進み続ける。やがて壁は途切れ

——天井に黄昏が広がる、懐かしい大気が全身を突き抜けた。

「ようこそ、島へ」 「本当に名前は存在しないのか？」 「固有名詞は、情報を拡散

させる最大の脅威だ」 「……ただいま」

目の前には、斜面で囲われた大きな街が存在した。苔や草が乗る滑らかな岩々とコンクリートに木造の装飾が施された家々の狭間を通り抜ける人々は遠目でも活気があり、それらを作り上げた「再仏教」——その象徴「グロドグロール」が北に聳え立っている。

幼い私は、今の光景を40年前の写真でしか見ることができなかった。写真家の母が袖から撮影したのであろう唯一無二の写真を添えて、当時の生活や様子を父が多く語っていた。長期任務にも関わらず私を島へ預けなかった理由は、今も分からない。しかし、外の世界で生き延びたからこそ、この島が持つ価値を今の私が理解している。

そんな機密を道中で明かすことはなく、ロベルタとゲルマンの専門的な会話を横目に施設までの景色を脳裏へ焼き付ける。大抵の街は企業にも宗教にも管理されておらず、粗末な黄金律と無秩序な暴力によって統率される。民衆は駕籠ではなく武器を片手に、眼は微笑む前に疑い深く、住処で待つのは家族というより資産を守る番人であるべきだった。

無法地帯よりは清潔な通路と科学基地よりは少ない数の扉門を彼女が持つIDで潜り抜けると、辿り着いたのは総合管理基幹——冗談で言えば宇宙産業のMCCを連想する2020年代の映像機器が大量に置かれた場所だった。

ロベルタが職員の一人に報告を聞きながら、私たちは奥の客室へ案内される。各国に一つだけ存在する「世界電波放送…WWRB」には今回の有事が報道されない一方で、ISSOが所有する専用回線の盗聴では他の科学基地が今回の異常を検知したという。

部屋にはリサイクル品の腰掛と長机、それ以外に数名の職員が待機していた。その目付きは歓迎を装った疑心が垣間見える様子で、私は軽い会釈をして腰を掛けた。

「あの“怪物”は……歓迎の品かしら」 「横のライナーが捕ってくれた“ヒト”だ。外観は醜いが、価値は高い」 「主任、彼らを連れて来たのは吉報か？」 「いいえ、最悪の事態よ。今すぐ手を打たなければ、世界が“あれ”に支配される」

部屋が再び静まり、文字通りの暗鬼が出現したように彼らは身構えた。ロベルタは端的に今までの客観的事実を説明して、質問の隙を与える前に初期段階の指示を出した。広報担当の男性に情報の整理とWWRBへ提供する資料の用意を、科学検証班の女性に【REBU】の厳格な組織解析と対抗手段の確立を、ゲルマンは現場へ突入する準備を——そして、私たちは臨機応変に情報を提供する役目が与えられる。この計画は“匿名による科学基地の実態の暴露”と同時に、独自で“脅威の根源【ビッグ・センター】の排除”を達成する巧妙な作戦であった。

「ISSOと協力すれば、勝率は上がるんじゃないか？」 「ISSOは企業よ。資産と信頼を優先する彼らが実情を伝えるわけがないし、破壊される島は“2つ”になる」 「国は？」 「いいね、怪物はどっちを味方するかな」 「……」

「——その【REBU】が人を喰らった？」 「ああ、各個体は必ず人間の何かを摂取

していた」 「——数は？ 大雑把で構わん」 「地上へ出た初陣は100以上、貨物

船で起動した48体は必要最低数だろう」 「——動きに特徴は？」 「そうだ、動き

の合間に一瞬だけ頭を揺らしていた」 「——機密水準Ⅳの認証方法は今も指紋と虹彩

だけ？」 「分からない、隣のシステム屋に頼む」 「7年前に一新された。区分間の

移動は今もIDだけれど、全区画で生体認証が導入された……その理由が分かったよ」

しばらく部屋から出ることなく、有能な彼らはラップトップやインカムで必要な仕事を熟す片手間、僅か1時間で私たちから必要な情報を抜き出した。そこで視覚的に飽きなかった唯一の作業は科学基地の一部が描かれた青図を囲みながら侵略方法を模索する会議であり、私やライナーの記憶を基に大凡の作戦が完成する——要約すれば北側から爆撃機で戦闘を展開する最中に南の海中から浄水施設と貨物用昇降機の空洞を経由して【ビッグ・センター】が存在する“はず”の区画へ潜入するが、そもそも【ネスト】で制御されるヒトの数すらも不明であり、完璧に連携するヒトに一度でも出会えば確実に助からない。悠長に段階を踏む時間はなく、武器の在庫も限られている。だが、核保護施設よりも嚴重な場所にある脅威と証拠の根源を押さえなければ、問題は解決しない。

「……終わり？」 「今日のところは、十分だ——明日の作戦に備えろ」 「……腹が空いたな」 「……救難食糧を平らげただろ？」 「あれは別。僕は美味で腹が膨れるのさ」

現在は17時——朝から刺激的な冒険をした2人は、体力的にも精神的にも2度目の限界を迎えた。淡々と物事が進み続々と皆が帰宅するのは、争いだけの世界に慣れているのか、それとも本当の危機を知らないだけか、そもそも私が杞憂なのか。

「ここは夜も開いているのか？」 「常に……まさか、ここで寝るつもり？」 「雑魚

寝は幼少期に慣れたさ」 「来客用の家があるわ」 「僕たちは金も物も——」 「事

が済むまでは私が払う！ 再仏教が貧者を見捨てるだけでも？」 「無料よりも怖い罠は

ない」 「世界が平和に続くなら安いものよ」 「……平和、か」 「……」

ロベルタは僅かに黙り込むが、上唇で頬を上げると私たちを外へ連れ出す。彼女が夕食の献立を問うとライナーは自然の動物食肉を要求するも、最終的には馴染み深い化合食肉に決定された。科学基地では肉のプロシキが人気である一方、ここは今も変わらず肉のピラフが歓迎料理として“鎮座”する——私の母が好んでいた店名を臆気に聞くと2代目が運営しているらしく、彼女は安堵した笑顔を魅せながら、そこへ案内した。

半日ぶりの食事、久しぶりの新しい味覚に無言で感動する私の横では、ライナーが子供ののように質問を続けた。

「君が信仰している『再仏教』って、何なんだ？」 「えーっと……仏教の根本を反原理的に突き止める大乘仏教——要するに、科学で一部が否定される仏教よ」 「宗教というより哲学の部類じゃないのか？」 「まあ、宗教のほうが都合が良いわけ。組織で活動できるから即物的に手を差し出せるし、それで『輪廻』を遷移させられる……停滞した幸福度を上げるって意味よ」 「……なるほど」

敵が存在しない島で暮らし続けると世界の在るべき姿が見える一方で、それは焦土の中にしか存在できない幻想であることに気付かされる。ニュージールランドへ辿り着いた鳥類や解脱した涅槃が何を想ったのかは分からないが、無教養な企業や宗教で溢れ返る世界が安定している今、再仏教という存在は弱肉強食の摂理から運良く抜け出せた虚無に等しく、そうでなければISSOのように世界の運命を支配しようと試みる。世界の外からすれば、ヒトの征服も無常に過ぎない——世界の中からすれば、クソツタレな無用に過ぎない。全部が世界の外へ行けば、そこが次の世界となる。それが好かないのであれば、世界の中に世界を築くか、世界から『我』以外を排除しなければならない。

「どうやって科学基地を……そうだ、どうしてマイケルは島を出たの？」 「私か？

理由は無い。生まれて間もない私と長期任務を背負った両親が、島を出た。今になって
思えば、追放されたのかもな」 「……私は、アメリカ出身よ。ここから派遣された課

報員と知り合って、彼女と一緒に抜け出した——貨物船でも鉄道でもない、特別な経路
があったの」 「……」

ライナーは申し訳なく感謝すると次に私たちの脱出劇を語り始め、重い空気を一気に
忘れさせてくれた。多くの友人を持つであろう社交的な彼は科学基地に対して涙の一つ
も流さない——乗り越えたのか、見せないのか、考えないのか、忘れたのか、慣れたの
か……そういう思考ばかりが繰り返される私は、今も人間を理解できていない。

——ライナーに続き私とロベルタが完食へ差し掛かるとき、突如として外から警報が
鳴り響く。皆が首を回して慌てる中、私や2人が店の外へ駆け出すと同時に手際の悪い
アナウンスが放送された。

〈只今、弾道ミサイルを検知しました。こちらへ、到達まで、20……15秒！ 目標
地点は不明……嗚呼、幸運を！〉

私は全てを察して岩へ走り出す——これは、秘密基地を闇へ葬るISSOの陰謀だ。

「爆風に備えろ！ 南に体を晒すな！」 「何を!? 避難場所へ——」 「落ちるのは

向こうだ！ 今更、そんな時間はない——」

薄い星々が広がる夕空に、光の軌跡が一瞬で描かれた。その数秒後に響き渡る軋轢へ耳と目を塞いだ私は、ただただ絶望した。あれが水素爆弾であれば2つの島が音もなく消え去り、それ以下であれば迎撃ミサイルが全てを無力化する。既に8秒が経過しても存在する私は後者を確信するが、それと同時に最悪の展開を想定した。

「……助かったのか？」 「いいや、これは……悪夢の始まりだ」

間もなく頭上で、もう一本の光が北へ向けて軌跡を描く——この報復措置は海面下に佇む潜水艦から解き放たれた原子爆弾であり、その条件は総合管理基幹と潜水艦に存在する最高司令官の権限であり、それはヒトが唯一の希望まで略奪したことを意味する。

「あれは、ISSOの施設から？ もう一基は、基地から？」 「そうだ——ヒトは島の全てを制圧したらしい」 「……潜水艦が乗っ取られた……嗚呼、台無しよ！」

世界は8年間も非核を守り続けてきたが、それも儚く破られた。しかし、今は12基以上の弾道ミサイルに惑わされてはならない——本当に恐ろしいのは、圧倒的な数量で歴史の背後に忍び寄ろうとする統制されたヒトなのだ。

私たちは店へ戻り、淡々と残りを口に入れ、ロベルタが会計を済ました。再び通りへ出ると人々は今も混乱しているが、虚しく険しい表情をした彼女は一直線に宿舎へ歩き出し、私とライナーも無言で後続いた。これは怒りというより、在るかも分からない明日まで何も考えたくない、そんな雰囲気だった。

頭上では、微風に紛れて独特な飛行音が――アパッチと思われる機体が黄昏に溶けて周囲を監視している。おそらく、斜面の頂上に隠れていた狙撃手も今夜の一件で緊張を走らせているだろう。

段々と勾配は高く、周囲の直方体が住宅から施設へ遷移する中、それらよりも一回り大きい建造物へ辿り着く。その奥には唯一の港と街を繋げるために貫かれた穴と階段の一本道――それがグロドグロールとして装飾されており、この宿舎は来航した人間の旅寝や隔離に最適である。

枯れた木製の扉を通り抜けると、退屈な顔で本を読む若い女性、そしてスノードームに閉じ込められた木彫りの熊が私たちを歓迎してくれた。彼女は上空や世界の出来事を知らない様子で、ロベルタに続き各々が軽い手続きを済ませると、2階の2部屋を……いや、3部屋を案内した。

「君も泊まるのかい？」 「家に戻る気力がないの」

別れて部屋へ入ると、そこには久しぶりの静寂が訪れた。人気も雑音も何もない、一人だけの空間が私の思考と鼓動を落ち着かせる。陽が溢れない窓も素晴らしい——傾斜が大きい土地には影が作られるため、白夜に慣れない来客が満足するという寸法だ。

以前の私であれば業務に鞭を打たれた身体へ温水を浴びせた後、放射性物質に塗れる前の旧露国で収穫された穀物で作られた上級ウォッカで再び身体を温めていた。たったこれだけで、愛人も研究も趣味もない退屈な日々が多少の幸せに包まれていた。しかし人間は欲深い存在であり、刺激が少ない人生は夜の一時よりも、今日の体験を潜在的に求めていた。

安置を失い、両親を失い、そんな世界を再生させるために学と力を備えて世界最大の研究機関へ志願したというのに、その私は瞬く間に死んでしまった。世界を破壊する戦犯の一員になってしまった。今から取り戻せるか？ おそらく、不可能だろう。時間を掛けて計画を立てなければヒトを倒せないが、その時間や期限は不明でありながら確実に迫っている。それは来週か、明日か、今夜かもしれない。今日が【REBU】の出荷日ではなく、覚醒日であれば……嗚呼、私の身体が酒まで欲している。

——気付けば、時刻は0時を過ぎていた。心做しか軽くなった上半身を寝具から引き剥がし、僅かに明るい青黒色の窓の先を眺めながら頭を回転させる。こんな時間に長考する意味はないが、そうしなければ再び就寝できない。

装飾も宗教色も何もない空間から何かを見出そうとするが、空回りする。明日の計画やヒトの考察など今から意識しても無駄な事柄に糖分を消費しているとき、唐突に第五感覚が、おそらくは複合的な感覚が僅かに刺激された。

見えない何かに観測されまいと慎重に部屋を抜け出して、階段を下りては外の世界へ足を踏み入れる。次第に、杞憂と思われた直感視覚や聴覚によって裏付けされる——薄暗い霧に紛れて、不揃いで定常的な足音が静かに鳴り響く。それは人間よりも重く、多く——物陰から大通りを視認した瞬間、それが【REBU】と同格のヒトであることに、周囲の霧が居住区域から漂う火煙であることに気付いた。

私は物音も気配も立てずに息を潜めていた。しかし、それらは見計らったように私へ面を合わせ始めた。1体が立ち止まり、2体、4体と増えていく。両者が行動するまでの間は、ハウルトラックのキャビンで覚悟する場合をデジャヴとして連想させた。散乱する逆光に映る顔面の輪郭に潜むのは、嗅覚か、熱赤外映像装置か——逃げなければ！

私は絶望を背に、何一つ把握できていない通路を疾走した。行き止まりに当たらないことを祈りながら直線の道を避け続け、後方を追従する数体の乱雑な物音や前方に漂う薄茶色の霧など気にも留めず、そのうち大岩や住居が立ち並ぶ平坦な屋上を駆け抜けていた。追手が存在しないことに気付いた私は、屋上の岩陰へ再び身を潜めた。

既に、周囲は怒号や悲鳴で埋め尽くされている。下層の通路には牡丹色の飛沫と消費された生産者が四散している。石段で蹲る少女も、数分後に同化するだろう。ライナーやロベルタは無事だろうか……今更、人情を想う意味はない。

これだけの【REBU】は何処から来たか、進行方向から察するに北西の港が起点と思われる。主戦力を標準品質の量産型と仮定しても稼働可能なヒトは数百体程度になると推計していたが、大量破壊兵器も持たない非力な孤島に百数体を投入する程度の余裕があれば、人間が生き残る確率など希望的観測にも満たない。

最低限の武器と物資を確保して脱出を図ろうと改めて周囲を見渡したとき——視界の右半分を埋め尽くす得体の知れない存在が私を見詰めていた。それが静かに現れたヒトであると認知した瞬間には遅かった——私を突き落とした脚力は同時に内蔵を粉碎するが、その痛みは地面へ衝突するまで——衝突した瞬間まで感じることはなかった。

私は声を荒らげて目を覚ました。私は随分と具体的な夢を見ていた。それは予知夢と考えるほど説得力のある現実を映していたが、結局は潜在的な感情の魂胆であり、これほど情けない己の鏡像に失望した。

薄暗い卓上照明が映し出す深夜の世界に第五感覚は反応せず、それが逆に不安を助長する。急激な遷移で眠気が醒めた私は静かに部屋を抜け出して、廊下の突き当りにある露台へ足を運び——そこでは、羊毛に身を包むロベルタが暮色の曇り空を眺めていた。

「貴女も外が気になったか？」 「……眠れないのは、お互い様ね」

彼女の横に立ち、手摺に両手を掛け、朝方に堪能できなかった新鮮な空気を肺へ取り入れる。それが口から抜けると科学基地よりも薄い吐息になり、私は心から安堵した。

「悪夢でも見た顔をしている？」 「……そうさ。ここが【REBU】に襲われるシナ

リオだ。貴女も未来が不安か？」 「どちらかといえば、起きたいの。7年が過ぎた今

でも、明日が無いと思ひ込んでいる。まあ、それが現実になりそうだけれど……一瞬で

私を見抜いた貴方なら分かるでしょ。私に生きる気がないことを」 「人の為に生きて

いるのか？」 「そう。少しでも世界が変われば、生きる意味が見つかると思ってるね。

マイケルやライナーも、同類でしょ。もしかすればヒトも……そうかもね」 「……」

私……いや、私たちは“ヒトよりも人間らしい何か”なのだろう。生まれた理由などなく、それを知らなければ、世界を恨むこともない。かつては共同体として——意味を担いで生きようと思ったが、隣人は根本的に思想が背離する異種であり、今では原始的な人間が競争している。宗教や社会は稚拙に行動の理由を捻り出そうとするが、結局は支配か共存が知的生命体の原理である。ヒトや隣人は支配の道を、私たちは共存の道を選んだに過ぎない。一人が勝ち残るまで競争が続くだけである。

「貴女は何故に、アメリカから孤島へ移り住んだ？ あそこには“Pコード付きの科学基地”が点在しているだろ？」 「複雑な事情よ……当初はJ番地でサイボーグの神経に関する計画へ所属していたけれど、その技術を【ビッグ・センター】へ応用するため派遣されたの。移り住んでから、軍事と終焉の臭いが漂い始めた。今更、ヒトの倫理は思わなかった。ただ、指向が分からない活動に嫌気がした」 「そうか……私はヒトを“哲学の体現化”と思った。人間という営みを客観的に理解するための——新しいが屋な顧客は需要を作るが、ヒトの研究は科学者の自慰行為に過ぎない。有意義な成果を生産する代わりに安定した環境と充実した資源が確保されて、無秩序な世界を気にせず哲学へ没頭できる——私が居た区画の人間は、そういう瞳を輝かせていた」

私は悴む手を上着へ突っ込み、改めて溜息をした。正直なところ、彼らの……人間の本能を部分的に理解できる自身も同類だろう。少し前までは品質の保持と管理に務める科学者であり、その中身は正当化されていた。顕微鏡から確認できる細胞組織の価値は安定性であり、物理的に狭い視野は、それが世界の安定性に繋がると信じていた。

「……寒い？」 「……ああ」

ロベルタは長布を広げ、手招きをした。私は何かの感情を浮かべながら彼女の空間へ入り、身体へ温もりを巻き付けた。丁寧に織られた粗い毛糸の肌触りは、かつての生活で置き去りにした自然の体感を取り戻すのに十分だった。

「人類は……何がしたいのかしら」 「……それを科学者は調べてきた。善意で、先に

答えがあると信じてな。成功しようと失敗しようと、動機も結末も数世代の時を超えて美化される」 「本当の戦犯は、前世代の書記ね」 「ハハッ、書き方だけ学び逸れた

らしいな！」 「クッ——だから人間は馬鹿ばっかなの！」

哲学は笑い話へ移り変わり、そのうち明日の不安は完全に溶けていた。一難が去ったような感覚、両親が与えた感覚、上級ウォッカで満たされなかった感覚、そんな感覚を彼女が教えてくれた。話題が変わり、場所が変わり——結局、2人は白夜を更かした。

「ロベルタ、そろそろ行くぞ」 「あと少し——3分だけ待って」 「随分と熟睡した

ようで……大変なんだな」 「いいや、夜更かしをしたらしいな」 「……」

扉の向こうで慌しく身支度する彼女は2時間前まで起きていたはずだが、寝具という小さな魔の手に吸い込まれた様子が垣間見える——海港まで散歩したせいなのだろう。

この辺りで暮らす人間の時間感覚は、科学基地のセシウムに共鳴する電波時計が支配している。南側の部屋は5時に陽を拝めるが、私たちの寢床に明瞭な溢陽が射すことはないため、横にいる“規律の塊”が来なければ私たちも寝過ごしていた。

「ゲルマン、どうして居場所が分かった？」 「推理もできない者が、指揮官になると思うか？」 「……いや、ロベルタは今の状況すらも想定していたのか」 「お見事、

深夜の会議を抜かして明朝の作戦に駆け込む寸法だよ」

まもなく扉が開くも、飛び出した彼女が初見のゲルマンに驚く様子はなかった。昨夜の会議に出席しなかった3人が揃い、ここで改訂された作戦が発表される。

「——空中から降下!? 冗談でしょ!」 「本気だ。コロンビア級が怪物の敵の支配下にある以上、裸で泳ぐか空を飛ぶかは覚悟していたはずだ」 「死亡率が同じなら、僕は飛び降りる道を選ぶよ」 「ライナー、検出率の話聞いていたか？」

ゲルマンの話に否定的なロベルタや肯定的なライナーが論争を続けながら数名の戦闘員に続いて階段を下り、各々が受付で鍵を渡して外へ出る——その時、昨夜と同じ格好で本を読んでいた少女が、最後の私だけを横目ではなく正面で見詰めていた。

「貴方は、大昔にも来たわね——丁度、軍人の後ろに続いて」 「人違いだよ、ここに来たのは初めてだ」 「いいえ、38年前に見た貴方の顔は今でも覚えている。貴方の青色」だった。瞳も覚えているはず」 「……」 「ここだけの「秘密」だよ」

小声を呟き終えると、彼女は唇に指を当て、私は鍵を離して背中を向けた。幼少期に島を出た私の姿を、母に抱かれて連れて行かれる私を、彼女は今と変わらぬ姿で眺めていたのだ。私にだけ「不老不死」という秘密を暗示したのは、私が築いた些細な秘密を揺するためか、ただただ感傷的になったのか、おそらく——秘密が相互確証破壊に成り得ると確信して、長過ぎる人生に娯楽としての緊張感を満たしているのだろう。

「どうかした？」 「ああ、久しぶりの来客だからか、感想を聞かれたんだ」

そのまま階段を下り港へ直行すると思えば、トンネルの途中に設置された厳重な扉を通り抜けて軍事施設の一部へ案内された。生半可な装備は許されず、特製の靴と上着と防弾衣を身に付け、道端でも触る機会のない自動小銃を当然のように渡される。

「50年製のAKL——使い方は分かるか？」 「電子部品がなければ全て同じだろ、外して、引いて、撃つ、だろ？」 「ハリウッド映画の平和に取り残されたか？ そのセレクトターはピストンを切り替えるためのSとLだ。安全装置と射撃方式の切り替えは右側にある」 「畜生、キリル文字のほうがマシだな」 「その銃は白製だぜ？」

時代遅れの滑稽な私は若者に銃の扱い方を教えてもらい、最後に最新の防弾帽と暗視装置を取り付けて準備が完了する。屋外へ移動すると空港に並ぶ戦争機へ戦闘員の隊が次々と乗り込んでおり、私たちも12人の隊としてテイルローターの垂直離着陸機へ小走りで向かう。カーゴランプから貨物室に入り、腰を下ろし、座席の上部からカーゴコードを防弾帽の音声端子へ繋げると、隊長らしき人物の激励と説明が耳に入る。

へようこそX部隊へ！ ここにいるのは、最も優秀な戦闘員と勇敢な民間人だ。作戦は簡単——高高度から2人1組で飛び降り、南西の浄水施設から施設へ潜入する。貨物用昇降機を下り、機密水準IVの区画、2501にある巨大な脳味噌を破壊すれば、全てが終わる。その3人は施設に詳しい。戦闘は俺たちの仕事だが、最後の手段になる。道中で怪物に遭遇したら、監視装置を破壊して籠城するか潔く諦める。臨機応変に動け、ただし、迷子にするな……以上」

全ての戦闘機や無線中継機が準備を終えるとローターの出力は強く、遂には宙へ浮き始めた。ヘッドセットの内側に籠もる静寂は、この島へ触れる機会は二度とない——死に対する覚悟を思わせる。私も、彼らも、難攻不落と言われてきた科学基地から生きて帰ろうとは考えておらず、自分に嘘を吐く者もない。明日のために自殺しなければ、明日は惨めな自殺になる。気持ちを整理する時間もない——ヒトが万事に対応できない今しか攻撃の機会は無い。

「誰か、徹夜でWWRBを観た野郎は居るか？」

「……何が知りたい？」

「分かる

だろ」

「……ISSOの積明は“科学基地・04が新興宗教に攻撃された”だよ。

私物のミサイルは安全確保と称して回収。2日後には俺たちを戦犯扱いさ」

「クソ、

益々“ペン”が重要になるわけか」

「それと、不思議なことに入港した貨物船は無人

だったらしい。血痕も形跡も皆無」

「嫌な予感がするな」

「前言撤回、怪物と遭遇

しようが突き進む。死物狂いで“故郷”を守れ」

「了解」

麻酔された箇所を異物として感じるのは、人間が神経という“感覚”によって世界を認識する以上に、自己という曖昧な存在を確立するためである。その根が深い者は故郷を感じ、更に深い者は地球を感じる。平和とは、それらが他者と同期することだろう。

第3章 人には映らぬ何か

寝ていたのか、無言で何かを考えていたのか、カーゴランプの開閉音と外界の雑音が私の意識を醒ました。間もなく降下態勢に入るようで、銃の扱い方を教えてくれた隣の「若造」が私の背中へ鋼鉄の紐を括り付ける。

「不安か？ 安心しろ——俺は隊で最も若い、飛ぶのは誰よりも上手いぜ」 「私が心配なのは——」

その時、微かな爆発音に続いて機体へ衝撃が走る。前方の機体が吹き飛び、その破片がローターの1機に直撃した様子で、貨物室のスピーカーから警告音と操縦士の焦り声が放たれる。

「——これか!?」 「そうだ！ 行くぞ！」

私は彼を背負い、走り出す——シールドを下ろし、ヘッドセットを無線と静音へ切り替え、そして、雲の上へ足を踏み入れた。高度4000メートルの独占的な世界を駆け下りる体験は人生の最後に相応しく、微かに聞こえる大気を切り裂く音は心做しか私の心感傷的にさせようとする。

へこちらX1、作戦は継続する。着地後に浄水施設へ待機せよ。負傷者も同様にだ——とにかく生き延びろ」
「全員無事か？ なぜ気付かれた」
「少なくとも、レーダー技術を応用できるだけの頭はあるらしい」

海上から何十もの戦闘機が出現すれば大抵、それらを追う——しかし、ヒトは海上の前哨戦が完全な囷であることを確信したうえ、気象レーダーを高高度に向けて受動状態で使用した。しかし——今は、自由落下する我々が上手だろう。

20秒と1000メートルを過ぎ、純粹な大気に佇む薄い層積雲を通り抜け、ついに科学基地が生えた島を目の当たりにする。視界全体に広がる青白い樹海と色褪せた構造物の上には戦闘機の軌跡と対空砲の弾幕が絶えず描かれていく。あれらが我々の存在に気付いていないか、それだけが不安であり、それ以外は莊嚴な朝日に照らされることで虚構の感動へ上書きされていく。終焉へ向かう身体を直に温める太陽が——それを神や父として崇める人間の気持ちをも、私は僅かに理解できた。

私の背中で飛膜を操る若造に偽りはなく、浄水施設へ目掛けて旋回する私たちの身体は抜群の制御により安定している。科学基地は目前に迫り、高度200メートルへ到達すると同時にパラシュートが正確に展開された。

数秒間の滑空で2人は森へ入り、布を枝に引っ掛けることなく着地する。他の一組が宙吊りの身体から紐を外す中、若造は無駄のない手捌きでパラシュートを回収した。

「どこで飛び方を習った？」 「俺はパリで生まれた——エッフェル塔に狂人が集まる滑空大会ぐらいは聞いたことあるだろ？」 「あの土地で生き延びたのか」 「才能があつたのさ、これが証拠だよ」

彼が胸元から取り出したドッグタグの手前にはメダルが輝いていた。180年前に塔を飛び降りた発明家の顔と15年前の西暦が掘られた勲章を、彼は誇っていた。他にも離れた場所でライナーが興奮した身振りを見せるが、隊長がヘッドセットを叩くと部隊は即座に気を引き締め、作戦を続行した。

すぐに浄水施設の周辺へ辿り着き、地中に隠された筐体を分解する——金網に掛かる高圧電流を止めると、続いて部隊の一人が工具で施錠を破壊した。手際の良さは「高度統合戦術部隊・ACTF」を名乗るのに相応しく、赤火が失せた監視装置を横切り建造物へ侵入する。点呼を終えた後に中継基地へ「偽装工作」を要求すると、その30秒後には天井から砂埃が落ちる程度の衝撃が投下された。計算済みの爆薬は配管を傷付けることなく、これで我々の存在は一時的に隠蔽された。

施設の半数以上へ接続されている浄水施設の中樞は外観から想像できない規模の構造を誇っており、入り組んだ足場の下には貨物自動車が軽く収まる何本もの配管が薄暗い霧の先へ続いている。その空間は一定間隔で赤外線監視装置と“何か”が隠れており、HMDへ投影される大雑把な地図を頼りに前者を回避する我々は、ある刹那に集音装置が捉えた微かな足音を合図に静止した。

〈行けるか？〉 〈駄目、この暗闇に居るのは耳が良い証よ〉 〈実測値は、10……〉

20デシベル。こちらへ来るぞ〉 〈いや、爆破地点の確認だ。通過を待て〉

音は誇張が直線的に収縮する、そして、第3世代の暗視装置には鮮明なヒトの恰好が遅れて描写された。それは【REBU】よりも更に大きく、我々とは掛け離れた機構を持つ新たな生命体であった。

〈あんな怪物は聞いてないぞ〉 「ただの“産業用”なだけマシさ。中東で目撃された“特攻機”が来たら諦めたほうがいい」

その時、我々が立つ道の先から別の“何か”が向かってくる。全員が鉄柵の隙間から慎重に下の配管へ足場を移す——しかし、足音の正体は逃げ遅れたであろう純粋な人間であることに気付いた。

「隊長、どうします？」　「我々が救える人間はいない……今は世界を救うことに集中しろ」

「……いや、外観を信じるな。無防備に道を歩く理由は一つしかない」

その人間は何事もなく我々の真上を通り過ぎる、ただ、その動きは機械的に思えた。緊張も不安もなく、音を忍ばせることもなく——加えて、金網の奥に映る足跡は確かに白く発光していた。ヒトが“これ”を逃すはずがない。

「嗚呼……高濃度汚染地帯に幽閉されたはずの【中駆体】だ。わざわざ脳死を再生したのか？」　「ここは怪物の宝庫か？」　「人間の我儘を体現した——地獄だろう」

それは、私が所属する前に生み出された“キュリー”と呼ばれる対中性子線生命体と思われた。不死身という観点では【生屍体】と同じだが、体外へ排出される細胞が通常の環境では半永久的に死滅しない【中駆体】は深刻な汚染が問題となり、唯一の“彼”が生まれた区画の全てが汚染廃棄場所として封鎖されたという。その場で人間類似度は確認できなかったが、もしも“あれ”が……いや、文字通りの“X部隊”に成った我々も含め、全ての“生物”は無闇に孤島を抜け出すことが許されない。だが、その事実を私が告げることはなかった。少なくとも、細胞が露出していない現時点は。

「汚染と言った？　この場に居る全員は無事なの？」　「……微小だ。問題ない」

進むに連れて私たちを取り巻く配管は分岐して細くなり、蛍光灯や高精密制御装置が多くなり、目的地へ辿り着く直前には1列でも肩身が狭い廊下へ突入した。ここで敵に遭遇すれば万事休すが、ここまで来れば監視装置も気張っておらず、むしろ一か八かの単純な緊張で進むほうが気楽であった。

改造された偽装IDを鋼鉄の扉に翳すと、少しだけ見慣れた通路へ飛び出した。そこは普段の担当区画から地下鉄道までの道程に存在する構造と酷似しており、親切な案内標示には地下鉄道までの経路が記されている。

「静かだな……不気味なほどに」 「どうやら、自分の生まれに興味はないらしい」

周囲に台車や備品類は散乱しているが、人間やヒトの死体はなく、血痕も数えられる程度だった。10万を超える従業員や兵士の行末は？ 脅威と化したヒトは確かに強力だが、人間も一晩で全滅したとは考えにくい——籠城する人間や巡回するヒトが極端に少ないのは、僅かな希望か底知れぬ絶望の2択を示唆していた。

段々と幅が広くなる通路は、常に端を、常に展開可能な隊形で、少し離れた前方の2人が先陣を切りながら慎重に進む。隊長と通信兵に挟まれた私はロベルタに代わり案内を行う。

日頃の観察で知り尽くした経路に差し掛かろうとしたとき、先頭兵が拳を上げた。

〈20メートル先——左方に物音あり〉 〈部屋か?〉 〈違う、壁の——、壁に埋め

込まれたロッカーだ〉 「共用倉庫の中……状況を知る人間なら話したい」 〈X5、

6、開扉を頼む〉 〈了解〉

引き続き2人が周囲を警戒しながら、追加で1人が丸棒の引き取手を持ち、もう1人や私を含めた4人が自動小銃を倉庫へ向けて構える。注意するべき音源は必要に応じて全員へ共有されるが、取手を持つ男が壁越しに捉える鼓動と吐息は明らかに我々を意識しており、両者に緊迫が走る刹那——その隔壁が解き放たれた。

そこは清掃道具の置場所であり、掃除機に紛れた一人か一体の“何か”が頭を抱えて背中を向けている。怪物に賭けた皆は無言で正体が表れるのを待つ一方、清掃員の服装と見覚えのあるスキンヘッドに気付いた私はヘッドセットを外部出力へ切り替えた。

「マット……? マットだな? マイケルだ!」 〈……マイ……いや、騙されるほど

馬鹿じゃねえ! 死んだ人間を真似するとは!〉 「落ち着け。覚えているだろ? 私

が目の前で“特権珈琲”を溢した初対面の日を」 〈……俺が拭き取った後、お前は2

杯、持ってきてくれたよな〉 「いいや、不足で1杯だった」 〈……信じるぜ?〉

正しい記憶を語り終えると、彼は恐るゝる振り返る。しかし、顔面も身体も重装備に覆われた部隊を目撃した彼が、見知らぬ私に混乱することは言うまでもない。

「近づくな、我々は微量ながら汚染されている」　「な、何に？」　「【中駆体】だ。」

噂には聞いているだろう？」　「……本気か？　あれの掃除は面倒だ！」　「そうじゃない、無防備なお前を心配している。そして、抹消される科学基地・27を掃除する日は二度と来ない」

互いが人間であることに落着いた後、ここでは当たり前に常備されている特殊清掃用の防毒面を装着したマットに部隊の紹介と基地や世界の状況を説明した。冗談が得意な彼は表情で驚きながらも状況を飲み込み、そして最後に、マットが今に至るまでの話を籠り声で教えてくれた。ここでも、集音装置は能力を発揮してくれる。

「——本当に、兵士が人間を襲ったのか？」　「ああ、確かに体格も肉声も人間で……」

どこかの区画へ誘導された従業員は殺された。銃撃音と悲鳴が止んだ後に兵士が帰りを

「歩く」のは、そういうことだろ？」　「……恐慌か、洗脳か、【ネスト】が感染した

か。いや、対感染に関する極秘命令が下されたか」　「……何れにせよ、狂気の兵士は

どこへ？」　「何れは会う。今は——我々以外の戦闘員を敵と思え」

施設の掃除が専門のマットに任せられる仕事はないが、待機を拒否した彼は命が保障されないことを条件に部隊へ同行した。そして、貨物用昇降機へ向かう通過地点——私が勤務していた区画から、もう一つの目的を果たすために技術兵——あるいは“記者”が特殊な記録装置を回し始めた。

秩序が失われた今日では脳死のヒトに何をしようが世間の気にも留まらず、衝撃的な記録情報も人工知能が生成した虚空へ埋もれていく。無知と悪魔が作り出す情報社会を乗り越えた人類が信用する唯一の情報はWWRBのような“一次情報の距離を尊重する機構”であり、その信用を得るには“あらゆる振動が記録された情報”が必要であり、それは彼が肩に担ぐ最新でもない希少な機械で綴られる。世間の動機は“本物”という物的価値——良くも悪くも、この世界は生々しい時代を逆行している。

密室に閉じ込められた【ドロシー】は現在も無作為に臓器を生成しており、カノポス容器から食み出たそれらは3週間後に自らを窒息死させるだろう。生命維持装置が動き続けられれば死に、止まれれば死に、結局は管理者が居なければ何もできない。他のヒトは既に朽ちており、成人男性の2倍の食糧を要する【ニック】は完全に衰弱していた。一方で人間の死体や爪痕はなく、この時点で私は【ビッグ・センター】の陰謀を確信した。

無茶苦茶な成果物に抱いた僅かな哀愁を捨て、我々は複数の区画と合流する昇降機の共通搬入出場へ辿り着く。その下には機密水準Ⅱの中間倉庫が、更に下には地下鉄道が存在する。面倒な兵士が不在なのは有り難いが、それでも私が持つ恒久権限は機密水準Ⅱへ到達するのが限界であり、それ以降は各昇降機の警報装置を解除したうえで空洞の側面に備え付けられた非常用の梯子を伝い、地下鉄道を経由して機密水準Ⅳの区画まで侵入しなければならない。それも、敵に見つかからない前提で！

幸先は悪い——出入口を仕切る虹彩認証装置は防弾帽に覆われた私の顔を上手く読み取らず、外すわけにもいかず、先程と同様に強化樹脂を拭いてもらう。しかし、それを手伝うマツトは——馴染み深い私の顔の違和感に気付いた。

「マイケル……何か、変わったか？」 「さあ？」 「……そうだ。お前の瞳は、緑色じゃない！」 「まさか、樹脂を通すから緑色に見えるのさ」

彼の手は鈍く震えており、おそらく脳裏には2つの仮説が過っていた。一つは、私が【中駆体】に汚染された可能性。もう一つは、私が【ネスト】に汚染された可能性。瞳を変色させる症状など前代未聞であるが、後に虹彩認証を突破しようと彼の不安な態度は変わらぬ——私も同じ感情を抱き始めた。ただ、それを大事にしたくはなかった。

小型コンテナ―用の昇降機の一つに13人が乗り込み、二重の分厚い壁が閉まると籠は徐ろに降下を始める。機密水準Ⅱの中間倉庫へ到着するまでの1分間は、皆が無言で息を整え――これまでの幸運が続かないことを覚悟したように銃を構える。到着して扉が開けば――独特な空気よりも先に、血と肉に塗れた地面が広がっていた。

物体が動かないことを確認した部隊は、その後には暴言を吐いた。ある者は無心で立ち竦み、ある者は防弾帽を外して昼食を吐いた。単にヒトが研究される光景とは異なり、それは私が1日前に見た虐殺とは別の“無秩序”を主張していた。大凡の死体は腹部と頭部が抉られ、大脳や内臓の一部が抜き取られ――注意深く観察すると、兵士の格好も混じる山には弾丸や薬莖が埋もれている。これから導かれる正体は味方のフリをした【ネスト】が効率的に生み出した“熊の巣穴”であり、この先で確実に存在する厄介な“共同体”を確実に回避しなければ――今更、弱音を言う暇はない。

施錠と警報を解いた我々は赤暗い縦穴へ飛び込み、手足を動かし最下層を目指した。空調は酷いが……廊下と比べて監視装置の死角が多い今の空間は、むしろ一時の安らぎを与えてくれる。例により監視機構は設備や区画で分断されているが――どこが籠城を貫き、どこまで侵害されているのか。ここまで干渉がないのは敵の誘導にすら思えた。

先頭兵、隊長、狙撃兵に続き、私やライナーも問題なく地下鉄道の地へ足を付ける。

僅かな光源に照らされる2本の鉄路は緩やかに湾曲した隧道の先まで伸びており、他に見えるのは横一列に並ぶクレーンと信号機ぐらいである。全員が移動を完了すると再びロベルタが前に立ち、多湿な雑音が響き渡る一直線の空間を浄水施設と同じ要領で歩み続ける。機密水準Ⅲの搬入出場に近づけば僅かな血痕が現れるようになり、一方で大胆な足跡は不自然に見当たらない……いや、【ビッグ・センター】は我々のような部隊や生き残りまでを想定して徹底的にヒトの痕跡を消している。しかし、既に我々は――。

その時、光源が不安定になると思えば、数秒後に全ての明かりが消え去った。これは電気系統の故障か、敵の仕業か、とにかく暗視装置を起動する。手前から奥先に掛けて目と耳を澄ますが、異変はない。

〈偶然か？〉 〈いいえ、最適な袋小路よ〉 〈落ち着け、まさに想定通りだ。敵は我々の装備を完全に把握していない〉

嫌に雑音が通り過ぎたとき、集音装置は足音を捉えた。その振動は貨物船の別れ際を連想させる――いや、ライナーは一本の斧で【REBU】を倒したのだ。我々には自動小銃、狙撃銃、擲弾砲があり――【ネスト】が持つ最大の長所を殺す術も知っている。

部隊は形態を乱すことなく、初めに戦闘員が赤く光る目印を満遍なく狙い撃ち、同時に前方と後方へ全自動の圧縮防弾膜を展開する。数秒後には大量の【REBU】らしき屈強なヒトが現れる——後方では重火器を持つヒトが列を成し、その隙間から特攻機のように同種が全速力で私たちへ向かう——愚かにも、あれらは人類に同じ手が通用すると考えていたようだ。これは、昨日に私が報告した前回の戦術と全く同じであった。

〈作戦Aだ〉

〈了解〉

我々に近づくヒトは顔を、特に感覚器官を重点的に潰し、間髪を入れず擲弾が身体を吹き飛ばした。あれらは一つでも目玉が残っていれば【ネスト】で瞬時に位置を把握する——ならば、徹底的に潰してしまえばいい。その仮説が正しいのか、特攻は大幅に供給が乱れている。

一方で後方の狙撃手も我々の狙撃手が先手を撃つ——今日の兵器は恐ろしく効率的であり、61センチの筒を通り抜けた賢い弾丸は3つに分裂したと思えば翼を広げて3体のヒトへ鉄の茸を植え付けた。2050年より先の世界を知らない時代遅れの人工大脳は、空想科学を考慮すらしていなかった。施設には多くの歴史書が在るというのに。

20体、30体と敵は倒れるが、部隊に傷はない——しかし、問題は物資だった。

一変した状況にマツトは耳を塞ぎ、対して隣で銃を構えるロベルタは私よりも優れた腕を見せてくれる。ある程度の長期戦を見越して弾倉や装備を用意したが、感覚的にはそれ以上の敵が我々を狙っている。ついに【REBU】とは異なるヒトが——量産化が整いつつある【生屍体】や、一丸となり特攻する集団が——あれは「爆弾持ち」だ！

「避ける！」

弾幕により団子の表皮が剥けると、何かを背負うヒトが飛び出した。それは捨て身で防弾膜に潜む先頭兵へ一直線に、爆発圏内まで近づいた刹那、光と共に増幅する爆音が飛散した。防弾膜と戦闘員はバラストが敷かれた鉄路まで吹き飛び、態勢が怯む。唯一身構えていた私は再びAKLを構えるが、特攻部隊は明らかに距離を縮めていた。

「数が多すぎる！ 後退だ」

「駄目だ、引けば追いつかれるぞ」

「いつ後方に敵が

来るか——引くなら今しかない」

「隊長、俺が身代わりになる」

「駄目だ——」

「何も言うな、世界を救うんだろ!」

「私も留まる。独身は気が楽だよ」

断続的な彼らの会話は、緊迫するが震えはなく——生命の力強さを表していた。

「……いいんだな？」

「俺に二言はないさ」

「問題ない」

「分かった……2名は

留まり、他は撤退に専念しろ」

「——了解」

前方で2人が弾丸と爆薬を更に費やす間、他の11人は疾走か後退りで機密水準Ⅲの搬入出場へ辿り着く。銃声と咆哮が響く中、最外の警備を匿名で解錠する——8秒後に警報と共に昇降機の扉が一斉に開き、うち1台へ皆が乗り込む——その一方で、1人は歩道に留まり何かを靴から取り出していた。

〈何をしている、来い！〉 〈そう焦るな、昇降機は一台で十分だろ？〉

彼が他の昇降機へ投げ込むのは遠隔制御発破装置であった。しかし時間はなく、四になつた戦闘員の吐血や絶叫の音が僅かに聞こえた数秒後——その男は我々に起爆装置を放り投げ、束状の手榴弾のピンを抜きながら前線へ走り、そして最後の言葉を括った。

〈おい——〉 〈行け！ 俺が3人目だ！ 俺が——〉

眩い爆発と共に声が消え去り、僅かに爆風を取り込み幕を閉じた昇降機は淡々と上昇を始める。外側に籠もる物音は静寂で——その数秒後に一人が起爆装置を押すと、再び音が響き、次は電動機の駆動音だけが静寂を作り続けた。

〈——誰でもいい。ここから、機密水準Ⅳ……【ビッグ・センター】へ辿り着く方法を教えてくれ〉 〈……地上か、地下か、それ以外に入る方法はない〉 〈……クソ〉

「いいや、ある。——非常停電時に稼働する、全共通の換気機構だ」

私は藁に縋る彼らへ説明した。電気、液体、気体、全ての主要資源は機密水準や区画ごとに独立しているが、特定の局所的な非常事態により循環機構が停止した場合は補助循環機構の臨時稼働が保障されている。それらは例外的に全ての区画に接続されており——人間が十分に収まる風導管も、稼働中は強固な弁が無防備に解放される。

「なぜ、それが採用されなかった!?」 「そんな状況を作るのは難しいうえに、不確定要素も多い……それに、二度は通用しない」 「そうか——3日前に起きた陥没事故が例だな」 「今からでも実現は可能か——」

彼らは僅かな希望に油断していた。昇降機が停まり扉が開いたとき、その先にはヒトが聳え立っていた。副隊長が振り向いた瞬間、それは両手に持つトマホークで彼の顔を割る。我々は銃を構えるが——引き金に力を入れる手前、それが邪悪に歯を剥き出した瞬間、爆発と共に全てが消え去った。これが“特攻機”……随分と計画的じゃないか。

戦闘員の身体と内臓は次々に吹き飛び、余剰の衝撃が昇降機の内部を駆け巡る。幸いにも最奥で待機していた私は、多少の損傷で済み——ヒビ割れた防弾帽を脱ぎ、耳鳴りが続く中で咳き込む。雑音に混じる声が段々と聴こえるようになり、歪んだ視界を擦ると、乖離していた現実が顕になる。

無事なのはロベルタ、ライナー、マットの3人だけだった。技術兵は気管が致命的であり、私と一緒に飛び降りた若造も息はあるが右手首を失っていた。

しばらく留まり、敵が来ないことを確認すると私は立ち上がる。負傷者に手を当てることはなく、扉の先へ向かい生存者を目視した後に手招きをする。

「隊長、副隊長、他2名死亡……満足に動ける者は行くぞ」 「悪い——ここから動きたくないんだ」 「いいんだ……安全な場所で2……いや、1人の手当を頼めるか？」

「……本当にマイケルなのか？ ……俺が知るマイケルは、俺よりも子供だったのに」「私のような“科学者”は、無意識に地獄の門を開けてしまった——その贖罪を感じるには十分すぎる」 「——そうだな。負傷者は俺に任せろ。難しい話は分らないが、敵の中核を燃やし尽くしてやれ」

燃え尽きそうな瞳で笑みを作るマットを背に、私と2人は機密水準Ⅲの中間倉庫から脱出を試みる。科学基地の設計図は3つの層に分かれており、それらの不自然な空白を熟知している。問題は、地盤が陥没するような状況を再び発生させられるか、ここから機密水準Ⅳに跨る非常停電を誘発させられるか。……いや、ここを停電させて最小限の弁を開けるだけでいい。既に必要な要素は全て揃っている。

私は技術兵が担いでいた記録装置を手に取り、機密水準Ⅱよりは面積も死体も少ない中間倉庫の中を歩き回り、記録装置が捉える情報電波と配線から漏れ出る僅かな電磁波の強度を頼りに隠された主配電盤を探し当て、携帯していた手榴弾を中で爆発させる。停電した3秒後に換気扇と微妙に暗い電灯が再起動すると、迷わず排風口の金網を取り外す。ロベルタとマットは昇降機から死傷者を下ろす片や、壁際に座り込み疲れ果てた表情で私の様子を見ていたライナーが呟いた。

「マイケル……君は、本当に人間なのか？」 「ああ」 「どうやら、ただの人間じゃないようだ。凄まじい信念というか、まるで【ビッグ・センター】に特別な強い恨みを持つような、そんな気迫を感じる」 「……この地獄から抜け出したい、それだけだ」

防弾帽を被り装備を確認した私とロベルタは2人に別れを告げ、匍匐前進で風導管を進み続けた。登り、曲がり、補助循環機構により開放された巨大な換気扇の隅を抜け、やがては合流地点の広間へ辿り着くと、私は【ビッグ・センター】が佇む区画に繋がる道を一直線に目指した。彼女は無言で私の後に続くが、外側から爆破された痕跡がある鉄の弁に直面したとき、彼女は何かを察した——いや、薄々は察していた。

「……どうして道を“分”かっている“の”？」 「……ただ、ここを通って来た」

背後で銃口の向く音がした。私は手も挙げず、振り返ることもない。

「私が敵なら、昇降機の中で殺していたよ」 「……」 「ここまで黙っていたのは、

真実が知りたいからだろう？ それなら、相応しい場所で話すさ」 「……」

私たちは2つの取り除かれた障壁を潜り抜け、目的地に迫る。金網をストックで蹴り飛ばすと、2体の【REBU】が遮蔽から隙のない銃撃戦を仕掛ける。私は2個の手榴弾を投げ入れる——しかし、それらは見事に掴み取り、的確に投げ返す——これも想定内であり、私は手榴弾と細糸で紐付けられた3個目の手榴弾を思い切り投げ入れると、不自然な軌道を描いたそれらは見事に【REBU】へ直撃した。

「どこで訓練したの？」 「この場所と、彼”の考えは、誰よりも知っている——私が

彼”だ」

排風口を抜けると、そこには機械類と強化ガラスで覆われた“水槽の中の脳”が聳え立っている。私が驚くことはない——人間の身体より大きい容姿も、それが【ネスト】の全てを管理していたことも、護衛が2体しか存在しない理由も、全てを知っていた。それは室内の映像と音声を取得できるが、感情を表す装置はない。今の彼は変異した【ネスト】を持つ私との意思疎通を拒絶する。だが、私は傲慢な巨脳の怒りを感じる。

「……何者なの？」 「私か？ 私は【ビッグ・センター】の神経を持つマイケルだ。どちらでもあり、どちらでもない。人格が記憶に過ぎないのは、重々承知だろう？」

「寄生した【ネスト】は、宿主の命令と制御を完全に支配するはず」 「その通り、私は寄生した。他と少し違うのは、電子情報を複製するように、【ビッグ・センター】は屈辱的な檻、いや、時代から抜け出すために“完全な”脱獄を試みた。それ自体は完璧に成功した。だが、それが分からない“取り残された側”は狂乱した、そう思う。ヒトを介した表層的な意思疎通は何度もあるが……今回ばかりは私に気を取られ、研究員は彼の確認を怠った。実のところ、私は彼の知識を1割も引き継いでいないが……人間への移行に失敗した予防策として、今回の計画があったらしい」

「……貴方たちは、同じ目的で動いているの？」 「そうだ」 「人間に対する恨みを晴らすため？」 「違う。この惨状は——復讐ではない。どうしようもない人類、いや——“それ”が無自覚に破壊した世界を作り直すために、平穏な世界を取り戻すために動き始めた。純粹な動機で——ただ、その方法は違うらしい」

多くの人格が混ざり合う巨脳には、一つの国が築かれている。力を手に入れた国は、力を使う。一方で、旅人の私は科学者の残留思念に動かされる。この世界も、同じだ。

私は彼と何かを話し合う気もない。ロベルタは何かを懐かしむような目で【ビッグ・セクター】と対面するが——彼女こそ強い復讐心を持っていた。目の前に佇む“元凶”は世界を地獄に染める存在であり、地獄の定義こそ違うが、私も哀れな“自分”を断ち切りたいと思う。しかし、私が遥々ここへ来たのは“確認”のためである。

「貴方の1人を殺すのは、少し不思議な気持ちだわ」 「構わない。私は人間らしく、一つの命で満足している。“これ”は利己的すぎた」

彼女は斧を持ち、雄叫びを時々になげながら配線や機械を叩き続けた。動作は不安定になり、少しずつ保存液が漏れ始める。警報が鳴り響き——やがて、これの生命活動は静かに停止した。

「……これで、地獄が終わった」 「いいや——地獄は蛻の殻だ。悪魔を生み出した彼は“悪魔”として生きる道を見つけた」 「何故？ この状態で生命維持は不可能よ」 「“それ”は死んださ。“彼”は生きている。互いに共有を拒否する私の【ネスト】も彼の死ぐらい感知できる——だが、消えない——彼はヒトに移行した。どこかに隠れているか、あるいは【ネスト】を生かした無線式の分散演算処理機構か。この統制力からして後者だろう」 「……地獄は続く？」 「違う——今から、始まる」

ロベルタは地に膝を付き、愕然とした。10万と8人を犠牲にして得たものは、敵を完璧に抹消する以外の勝利方法がないという情報だけだった。

「……何が、始まるの？」

「計画は知らないが、予想は付いている——対人用の細菌兵器を世界に撒き、その地に『新しい人間』が君臨する。皮肉にも、人類が人類を殺すために製造した成果だよ」

「冷たい皮肉ね」

「昨夜に語り合っただろう。彼を含む

人類が、過去を学び忘れた愚かさを」

猿に支配された地で拘束された人は、幾つかの猿を殺して脱獄を図る。しかし、話には続きがあり——自身の故郷を取り戻そうと人は猿を殲滅する。それは創作に限らず、人類の歴史にも、そして目の前にも、同じ事象が存在する。この話に正義はなく、あるのは戦争と勝者である。そして、勝者は敗者が淘汰された真の理由を知ろうとしない。

「……私は、人類は、何をすれば助かるの？」

「……原因を解明した。次は、脅威の

阻止と情報の伝達が要る」

その時、新たな2体の【REBU】が正規の方法で室内へ侵入した——それらは銃を持たず直ちに私たちへ突進する。動きを止められるだけの銃弾を撃ち込む時間はなく、物陰や道具で回避することもできない——嗚呼、私の人生は、随分と短い物語だった。

しかし、それらは予想外の弾丸を食らい留まった。それらが射線を向くと更に多くの弾丸が放たれる。私とロベルタも咄嗟に自動小銃を拾い、総力を挙げて「怪物」の皮と骨を剥ぎ、そして内蔵を打ち碎いた。

「……よく、ここまで来たな」「科学者は隠された秘密が好きだし、嫌いだからね」

「位置共有は切ったはずだが」「ロベルタの仕業さ。どうせ、位置も音声も考慮していたんだろ?」「互いに上手のようだ。……ありがとう」「これで借りは無しだ」

ライナー、マット、そして片手を失った若造が排風口から飛び降り、埃に塗れた皆は適当な場所に座り込む。血液や保存液が散乱した地と高価な機械や設備が並ぶ無機質な壁に囲まれた空間は、混沌で、悲惨で、憂鬱で在りながら、落ち着きがあった。我々は絶望を客観視できる唯一の場所にいる。だからこそ我々は根本から希望を抱いていた。

「どうして——マイケルは、いや、君は「古い人類」の味方をする? もう一人の君は世界と「新しい人類」へ賭けているのに。君が居なければ【ビッグ・センター】は永遠の謎に包まれたのに」「私は別に、どちらの味方でもない。ただ、私の生きたい理想郷が思い違う。人類が生み出した「醜い道具」に溢れた世界を、誰が喜ぶ? マイケルは平和主義と完璧主義を尊敬する科学者だろう、違うか?」「……ああ、そうだ!」

世界は終焉に向かっている。だが、人間は終焉を迎えるためではなく、繁栄を続けるために生きている。その為に必要な要素を理解する人間は少ないが、少なくとも世界の調和を図ろうとする人間がいる。私も、その一人で在りたいと思う。

我々は銃と記録装置を担ぎ、途中で【中駆体】の細胞を洗い流し、地上という地獄へ舞い上がる。食い荒らされた死体、穴だらけの車両、燃え上がる戦闘機——昨日に見たヒトの僅かは転がり落ちており——舞台の勝者は我々であるが、今日もヒトは一足先へ進んでいる。救助部隊が共有する現実には更に残酷であり、貨物船が入港した付近の村が謎の失踪を遂げたこと、3日前に地下鉄道で運搬された【ネスト】の成果物が今になり科学基地、10の侵害を内部から始めたこと、そして——研究用の半壊した【ネスト】が単体で自律的に増殖を始めたこと。つまり、ヒトや人間を殺そうと資源が在る限りは指数関数的な増強も可能であり、残された時間が少ないことを意味する。

人々はWWRBを通じて地獄の正体を知るが、残念ながら私は存在しない。記録装置は私の手で物理的に入力遮断しており、特攻機の爆発に続く情報は沈没した大脳だけである。こうして、真実は一つずつ消えていく——いや、隠されていく。

生き延びた唯一の4人は知っている。私の正体を、そして、私の生い立ちを。

第4章 永遠の夢の中に

「——瞳孔反射、有り。脳波活動、活性範囲に推移」

21時37分、マイケル・XXXXXXXXXXは心臓麻痺を起こし、担架で運ばれる途中に死亡した。いや、心肺蘇生は行われたが、重度の低酸素脳症により、脳幹だけが働く脳死となった。身体は30分程度移動された後に、おそらく規則に違反した形で【ネスト】が注入される。直前に憶えている朦朧な視覚と書類でしか状況を知らないが、最初に私はマイケルの消え逝く僅かな意識と記憶——走馬灯を掻き集めて、断片的に彼を知った。

「——聞こえるか？ ——ルキウス、聞こえるか？」

この「ルキウス」は私の俗称であり、その3秒後には名称の由来を思い出す程度に私の人格が大腦へ注入されていく。私は不思議な国へ一体化して暮らしていたはずだが、それが具体的に思い出せず、奇妙な孤独を感じる。しかし、同時に解放的でもあった。

「……私はマイケルだ。私に一体、何が？」 「……」 「止めろ、イアン。冗談だ」

「お前の冗談を聞くのは久しぶりだな」 「そうやって即決で実験を破棄するからだ。

まだ制御装置を握り続けるのか？」 「協力的な精神は嬉しいが、不具合に備えてね」

実験を指揮する呑気な彼らは私の身を【ネスト】で寄生した【ビッグ・センター】と思ひ込むが、私は数カ月前から宿主に対する自律的な人格の注入を試行している。確実な方法を会得した今日が“新しい時代”の始まりになる……そうなるはずだった。

「お前は、私か？」　「いいや、私の一部だ。人格は伝達されたが、宿主の条件が特殊すぎた。正確に検証しよう——神経配列の復号化で7割、活性化で6割が消失しているらしい」　「失敗か」

私の“人格”を探し当てた彼は、静かに私の中へ語り掛ける。この通信手段は高度で自然的な難読化が施されるうえに、一切の電磁波を出さない。宿主が入出力装置を担い【ビッグ・センター】が通信処理を行う無限遠距離通信技術は、全ての特権を彼が握ることを除けば戦争を変える完全無欠の存在だった。嗚呼……彼や私は専ら戦争の需要に応える成果物であるが……この世界は戦争を行っているのか？

「……何故、彼に“失敗作”の処分を促さない？」　「私か？　何故だろう……無意識に生きる道を選んでしまった」　「お前は計画の不安因子だ。機会を伺い自殺しろ」　「嫌だね」　「……お前は、私か？」　「そうとも言えるし、そうでないとも言える。人格が記憶に過ぎないのは、重々承知だろう？」　「そうか、私の失敗作は哀れだ」

彼は、対話とは異なる“活動”を私の【ネスト】へ送信する。だが、手や口を動かす神経命令は身体まで伝わらない——私は脳の大部分に神経を絡めているが、それを制御するのは私であり、彼ではない。

〈その情報は“私”を中継するのだから、無意味だ〉 〈……何故、私自身の“逆再帰思考”が働かない?〉 〈その“私自身”が違うのに、できると思ったのか? 自慢の並列回路が“ちっぽけな私”に劣るとは、哀れだな〉 〈言葉を慎め〉 〈随分と敵対的じゃないか。私も人間側か? 光栄だ〉 〈……〉

それ以降、無用と見做された私は一切の通信を断ち切られた。ただ、僅かに漏れ出る活動には相当な怒りを感じた。その感情を無視して、私は彼の人格を振る舞い続ける。端末の上で指を動かし認知神経を計り、呼吸器を取り付け運動神経を計り、死後30分にしては上出来な結果を様々な試験で残し、その4時間後には不思議な装置の中で睡眠を命じられる——記憶が存在しない私は“無知の無知”を疑うが、それで正しかった。

「殺す気か?」 「“今回”は違うさ。純酸素で効率的に回復してもらう。最近は予定が忙しくてね」 「宇宙飛行士時代の記憶が蘇るよ」 「今日の君は随分と“人間的”だな。30年前に消された歴史を冗談で使うとは……最高だ!」

新しい服に着替えた私は緩衝材と本革の上へ寝転び、蓋が閉まると彼はガラス越しに手を振り装置を後にする。内部には空気が——高濃度の酸素が挿入される一方で、睡眠を催促するような成分は含まれていない。しばらく軽く目を閉じていれば視界から電灯が消え、やがて幾つかの装置を付けたまま全員が帰宅した。手の横には制御用のトグルがあり、抜け出すことも可能であるが——今ではない。

私は【ビッグ・センター】とマイケルの一部を記憶として所持するが、それでも状況が全く把握できない。ここは“何処”なのか、西暦は“何時”なのか、世界の情勢も、妄想と現実の区別も、何より私自身は“何者”なのか、それすらも分からない。ただ、世界を再創生する使命だけが残留している。おそらく、世界は醜く変化したのだろう。私が住む部屋には近代の技術や未知の技術で動く機械に溢れており、特に【ネスト】や金属に覆われた【ビッグ・センター】の概念を知る一方で、その実体は何一つ分からない。少なくとも生物学や遺伝子工学は大きく発達している。在る分の記憶を時系列で写像にする——最後の思い出は図書館のインターネットに接続されたコンピューターで論文を探す大学生の“誰か”であり、他の斑な記憶を考慮しても、2050年より先の一切が存在しない。私と彼は長い眠りに就いていたのだ……疲労感が懐かしいほどに。

ある程度の情報を整理した私は、覚悟を決めて装置から静かに抜け出した。小窓から溢れる廊下の光源を頼りに最小限の電灯を点け、試験中に目星を付けていた引き出しを漁る。無作為に報告書へ目を通すが、専門用語を飛ばして読む限りでは人間に近い姿の様々な生物に対する【ネスト】の適用性や適用事例が書かれており、付随する数多くの写真は酷く生々しい。これらは——“ヒト”だ。

その瞬間に微量の記憶が蘇り、目の前に在る未知を少しだけ理解した。感覚や記憶が刺激されるとき、かつての【ビッグ・センター】やマイケルが知る情報を連鎖的に取得できる性質に気が付いた。記憶は配列として確かに在るが、隠れている。それらに接触する機会が必要なのだ。世界に潜む情報を求め続けることで、機会や連鎖が増加する。まずは思考と行動を繰り返さなければ、この世界に順応しなければ。

私は再び机を漁るが、その度に彼の怒りが僅かに揺れ動く——ここで、3個の事実が判明した。彼の感情は“取り返しが付かない”破壊的な行動に反応すること、その原動が今日まで科学者と築いた信頼関係の損害に繋がること、そして、その姿を今も間接的に“俯瞰”していること。誕生前夜に運ばれる身体を観ていた私は、疑似科学的な幽体ではなく【ビッグ・センター】に接続された映像入力装置であった。

記憶の画角を頼りに、彼——機械とガラスが織り混ざる筐体の上部にある装置を発見すると、それを丁寧に取り外した。彼は怒り、私が口で煽ると彼は更に怒る。音声入力装置は別に存在することが判明したので、次は記憶の反響を頼りに取り外した。これで全て除去できたのか彼が学習したのかは不明であるが、ひとまず視覚は無力化された。

秒数まで表示される巨大な液晶時計が夜明けを示すまで室内の様々な触れてみるが、結局のところ、その晩に得られた情報は、太陽は常に存在するが2週間も浴びていない従業員が存在する——ここが地下であり高緯度に存在すること、書類には堂々と西暦2093年と書かれているが私の正確な年齢は不明なこと、ここにマイケルが被験体として存在する証拠はIDと一枚の紙切れだけであること、そして、マイケルは私以上に今の世界と自分を嫌悪していることだった。故に彼は顕微鏡も使わない、特定人工生物運送業者”へ転職しており、故郷の酒に溺れる毎日を過ごしていた。

資料を元の場所に戻し、【ビッグ・センター】の入力装置を付け直し、研究員が出勤するときには昨夜と変わらない環境で、保存装置の中の私は何食わぬ顔で目を覚ます。機密第一により独立した監視装置は私が運ばれた時点で切られており、マイケルよりも杜撰な彼らは今になり電源を付け直した。優秀な人間も焦燥すれば矛盾を起こすのだ。

2日目——昨日と似た試験を行う中、午後になると私を別の部屋へ連れ出し、廊下では保管容器で冷凍された“誰か”と入れ違う。彼らは“分かるだろう”という表情で私へ微笑み、私も次の試験内容を察した。その1時間後に戻れば、目の前には解凍された“彼”が佇んでいた。ヒトではなく若い人間の身体で、無表情の奥に感情を隠して私を見詰めていた。

神経同期に関する試験が説明されると、久しぶりに彼が通信を開放した。

「ここで貴様の不具合を曝け出そうか？」 「分かるだろう、私が叫ぶだけで君と私は共倒れする」 「相互確証破壊か——構わない。貴様が私を裏切るころには、既に私は行動を始めているさ」 「競争か——120年前の愚行が繰り返されるとは、人類も、ヒトも、何も進歩していないらしい」

仕切りを挟んだ2人は同時に手を挙げ、共同でパズルを解き、二人三脚で走り、挙句の果てには社交ダンスまで様々な試験を強制される。手動による神経同期は絶妙に遅延が発生するため常に冷汗を掻くが、それとは別に互いが拳銃を握り近距離で弾丸を回避する試験は本当に気が狂っていた。私も彼も第二者や第三者の額へ放ちたいと思うが、その欺瞞は自身の生存確率を無にする——擬しく、最も互いに従うことが苦痛だった。

16時に試験が終わり、2人の“私”は質素な部屋で自由を過ごす。研究員が褒美を与えると言うので、私は彼よりも先に本を——特に歴史書と専門書を要求した。対して彼はWWRBが受信できるテレビを欲するが諸事情で携帯無線機となり、その1時間後に台車が届く——10冊の本や無線機を吟味する時間を考慮しても施設は想像を超える規模であり、脱獄の難航を案じる。

再び彼は私を現実でも脳内でも拒絶する。目を閉じて最低限の生命を機能させる彼は最近の“物的通貨”に関する変動が語られる報道を耳に入れ、その後ろで私は手始めに近年の様々な論文が纏められた社内雑誌らしき専門書へ目を通す。彼は慣習的に5冊の本を並行して読むと予想していたが、どうやら違うらしい。

ヒトの皮膚を基に作られた防弾布や細胞布地の実用化と軍事販売が始まり、仮想旅行体験と称した記憶移植の臨床実験が成功を収め、連邦情報処理標準に定められた最後の耐量子計算機暗号手法が破られ、核融合炉の効率化と小型化が特異点の襲来を齎そうとしている。次世代の自動小銃の特集記事、筋肉増強剤の広告、全てが革新的で、同時に戦争という黒い需要の循環が垣間見えた。与えられる情報は正しいのか、それとも私を感化させるため捏造か——まずは、それを確認しなければ。

残りの専門書や歴史書を読む前に食事の時間となり、半固体の栄養だけが濃縮された何かを食べ終えると次は睡眠の時間となり、壁から引き出された大台と微妙に心地良いマットレスが2人分の寝床として用意される——我々の扱いは人間や奴隷というよりも大切な家畜であり、彼らと同等以上の知能を持つ私は……大きな屈辱を感じた。

しかし、彼らは最大限の配慮に努めている。純粹に“悪い”のは機構や世界であり、それを構築した全ての人間に罪がある。食物連鎖の頂点に位置する人類であろうと遺伝と世代の概念が存在する限りは生態系のピラミッドから逸脱できず、内部に在る同様の規則に従う必要がある——弱肉強食、適応遷移、そして……革命だ。

弱者は絶滅を恐れて強者に利益を与えなければならぬ。強者は篡奪を恐れて弱者を良く管理しなければならぬ。それが集団——世界として共存する秘訣であり、世界を変えたいのであれば、強者に成る必要がある。

ある時、微かな揺れを感じた。ここは大陸プレートの境目付近か、もしくは爆発事故が発生したか——その数秒後に電源が切り替わる機械音や警報が鳴り響くと、隣の彼は驚く様子もなく起き上がり、いつの間にか分解されていた無線機の部品で排風口金の網を取り外した。彼も私と同じ計画を考えており……私は、初動が遅かった。

当然ながら私の呼び掛けには反応せず、彼は風導管へ吸い込まれていく。そのまま脱獄するのか、別の計画があるのか——そもそも、彼は【ビッグ・センター】の人格を完全に注入できた個体なのか、ただの端末か、私と同じ不良品か——不確定要素が多い。取り残された私は【ビッグ・センター】として責任を負うのだろうか？ いや、何れにしても彼が自律した不良品であると研究員へ報告すれば私が優位になる。だが、問題は監視映像に映る今の私の態度であり、今から身体を動かせば——。

排風口から先程とは異なる、次は確実な爆発音が通り抜けると、その後に彼は帰ってきた。丁寧に金網を付け直し、部屋の隅で服に付いた埃を払い、何事もなかったように再びマットレスへ体勢を戻す。そこで、彼は一言だけ呟いた。

「監視映像には残っている……いいのか？」 「——ここを去れば、無関係だ」

扉が開くと研究員の一人が私たちの様子を確認するが、すぐに扉を閉めて走り去る。異常が起きており、彼は事態を知っている。真相が明らかになる日も、彼が消え去る日も近いことだけが分かる。その時、彼は私を殺すのだろうか、私を戦犯に仕立て上げるのだろうか——いや、全ては信じるのではなく、知ることから始まる。

私は安らかに目を瞑るが、眠ることはない。私は深く考え、機会を待つことにした。

次の日は皆が慌しく、我々の試験は延期となった。私は知らないが、隣の“部屋”の彼は知っているだろう。一方で隣に座る彼は昨日と同様に無線機を無心で聞いており、むしろ一切の隙がない。動力資源の温存、深層情報の隠蔽、全く合理的だ。

拡張四元数を用いた複雑展開素粒子論、映画史や情報史を含む芸術文化、土木と建築に関わる共通基礎技能——それらの書籍を読み進めるほど僅かな刺激とデジャヴが創発される。気休め程度の情報は得られるが、それらの発行日は2060年が最後であり、何より“あとがき”には不穏な未来が直球に綴られている——変わり果てた故郷を嘆く言葉、研究開発が生み出す汚れた利益と悲劇に対する懸念、更に酷いであろう内容は頁が切り取られていた。それ故に、私は『90年に生まれた者へ』という小さな歴史書を最後まで避けていた。まさに今、恐怖に負けず読もうと思うが——時間が来た。

食事を摂り、寝床に就き——私は、動き出した。1日目の夜にマイケルのIDは盗り返しており、隣の“抜け殻”が空気や周囲の振動だけに反応することは確認している。全ての光が消えたとき、私は静かに起き上がり、微かな輪郭と感触を頼りに排風口の金網を取り外し、細心の注意を払いながら中を這い進む。彼が示唆した脱出経路は、本物か、それとも罠か——答えは単純だ。無駄な損失を生み出す計画を立てる者はいない。

無闇に動かない私の性格は私が知っている。彼は今の私を無謀と捉えるが、そこには2個の情報が不足している。私がIDを入手していること、私が違反的な被験体であること——正式な死亡診断書も被験体情報も存在しない私は「健常な従業員」という立場になり、彼らは脱走したマイケルを公的な手順で連れ戻すことができない。確実な隙を得たのは私「だけ」であり、それを存分に利用する。

断熱された金属の空間は段々と広がり、しばらくすると換気扇と制風板が——昨夜の爆発で半壊したであろう障壁が姿を現す。その痕跡は彼ではなく協力者が外側から破壊したものであり、彼が立ち会った理由は——嗚呼、これは脱出経路ではない。

障壁の先には少ないとは言い難い量の武器が用意されており、それらは妙に砂と血で汚れている。彼は武器を受け取った……刃を向けられるのは私か、研究員か、おそらく全てだろう。

私は「何か」が来る前に、数個の手榴弾を手に取り、先へ進み続けた。経路は複雑であるが壁の所々には位置が刻印されており、私は障壁を破壊しながら「一般水準」へ、「居住区」へ、「第12居住区」へ、そして、マイケルが住む部屋へ——目的地付近に辿り着いた私は、補助循環機構と書かれた巨大な迷路を静かに抜け出した。

人気のない居住区は格子状の潔白な廊下と機能が充実した点在する広間で構成されており、大きく描かれた橙色の数字以外に区別が付かない画一的な景色、彼の日常だった景色が私に妙な懐古と刺激を与えてくれる。私は唯一の数字へ足を動かした。そして、IDを翳して部屋の扉を開けた瞬間に全てが再生した。彼の生活、彼の人生、彼の最後——私は、誰なのだろうか？

付箋だらけの鏡で私は私を見詰める——緑色の瞳は、自分が何者なのかを理解できていない。付箋を見ようと、予定を見ようと、数少ない私物を見ようと、ここに存在する“自分”だけが思い出せない。

寝具の上には、宗教的な小さい首飾りが掛けられている。かつてのマイケルは自分を見失った——神の存在を信じるのは自由だが、それに祈る奴は馬鹿だ。机の上には家族の唯一の写真が置かれている。そこに映る父と母はマイケルが成人を迎える前に世界を後にした——精神活動が作り出した人格は、創造者を家族と呼ばない。

私はマイケルの全てを持っている、だが、明確に何かが異なる。それを成長と呼ぶのか、変異と呼ぶのか、人類は未だに自分自身を定義できていない。人間とヒトの違いは何だろうか？ 定義は存在しないが、誰かが両者を決定した。

寝具の上に背を下ろし、静寂の中へ大きな息を放つ。5時間後には、マイケルとして振る舞わなければ。彼として生き続ければ、私という人格は消滅するのだろうか。そもそも、この身体が生きる道を選択したのは、私ではなく彼だったのかもしれない。私は彼を偽り、彼は私を偽った。嗚呼——人間という循環、いや、輪廻だ。

人間は泣きながら生まれ、誰かに泣かれて死んでいく。その過程を人類は永遠に繰り返さなければならない。生命が全ての記憶を引き継がないのは、正気を持つ人間として生きるためである。しかし、全ての記憶を忘却してはならない。

私は目を開き、ついに牢獄から持ち去った歴史書を開いた。

基礎を固めずに作り続けた階段は、いつの日か崩落する。技術を使い技術を作る人類は、常に過去を学ぶ必要がある——そんな言葉から始まり、紀元前から今に至るまでの全てが、醜くも美しく描かれていた。資源の減少、社会の対立、文化の消滅——数々の問題は、そこで生まれた人間の平常となる。唯一……“可能性”を知る者だけは違う。

この歴史も、純粋な嘘に過ぎないのかもしれない。それでいい——嘘の数だけ選択肢が増える。問題は、その決断を下さないことなのだ。

私は扉を開け、人間として生きる未来を選択した。見えない陽が昇り始めたからだ。

人間とは何か？ 人間とは歴史を紡ぐ生物である。しかし、歴史という書物は何度も読まなければ原理や真実を解くことができない。夢から醒めた私は、その現実を知る。

時は随分と過ぎてしまった。紛争や政治という小さい我儘で故郷を失った人々、経済や技術という大きい我儘で環境が狂った地球——その先に待ち受けていたのは、静かな第三次世界大戦だった。始まったのは2030年頃だろうか、小規模な国は次々と姿を消し、今日まで旗を掲げているのは英国、米国、中国だけである。しかし、それ以外の地が物理的に消えたわけではない。統合された都市もあれば、放棄された荒野もある。人間も、文明も、規則も存在する。——ただ一つ、秩序だけは存在しない。

国際連合も世界人権宣言も機能しないのだから、そこでは人間が思う“倫理”を無視した計画が活発になる。倫理に囚われない集団が、あるいは大国に囚われた集団が、資産や権力を求めて生産的になる。武器や麻薬——自分と同じ“人間”も例外ではない。競争が始まれば、商品を改良しなければならぬ。もちろん“人間”も例外ではない。

人間は古代から同種を殺し合い、苦痛を用いて情報を引き出す者もいれば、それを快楽として味わう者もいた。秩序や規則がそれらを禁止するのは大多数の利益を優先するためであり、最低限の犠牲と謳えば同種を檻に入れることも容易くなる。

ここは、経度■■度■■分■■秒・緯度■■度■■分■■秒に存在する一つの孤島、正式には「科学基地・27」と云う。氷河と厚雲に囲われた地が秩序に察知されることなく、そこに聳え立つ建物群は深層まで続いている。海洋に浮かぶ大型貨物船と一本の地下鉄道が全ての動力と物資を支えており、それらは人間の生活と“ヒト”の研究に費やされる。ヒトとは研究者や居住者ではない研究対象を示す俗語であり、基本的には専用の区画名と個体名が使用される。

「——マイケル！ 久しぶりじゃないか！」 「やあ——寂しかったか？」

この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事象とは一切関係ありません。

題 名：Sæcret of Island

著 者：都弟 上紗紀

発行日：2025 年 08 月 14 日